

「長春真人西遊記」の経路解明
Elucidation of the route of
“Travels to the west of Qiu Changchun”

安田公男
2023 年 12 月 12 日

目次	頁
研究の目的と方法	2
序章 出発までの経緯	4
第 1 章 出発からチンカイ城	5
第 2 章 チンカイ城から大石林牙	20
第 3 章 チンギス・カンの元に向かう	36
第 4 章 シル河の行在	43
第 5 章 帰国	50
終章	58
参考文献など	60

要約

チンギス・カンの西域征服が後半にかかった頃、戦地を訪れて彼に会った民間人がいた。道教の指導者の一人であった長春真人一行であった。漢土から一年がかりでやってきて、約 1 年滞在してチンギス・カンに道教の教義を語った後、半年掛けて帰国した。その旅行記が、「長春真人西遊記」として残っている。これは当時の内陸アジアの地理、風俗、モンゴル軍の実情などを知ることの出来る貴重な史料として有名である。だが、辿った経路の多くに加え、二人が最初に会った地点も不明とされている。本稿ではグーグルマップ（GMap）を用いて、彼らが旅をした経路を辿り、その詳細を明らかにしようとしたものである。現代の道路表示、経路表示に加え、地面に残る通行痕も判断の参考にして、難解であった多くの経路を明らかにすることができた。その結果、長春真人とチンギス・カンの最初の会談地は、現アフガニスタンのバグラーンであったこと、又、長く不明とされてきた西夏の首都クズ・オルド（大石林牙）の位置も明らかにできた。旅の全経路を、地図を入れて説明した。

研究の目的と方法

1. 目的

チンギス・カンがモンゴリア全土を統一後に西夏を攻めたが、これは他国攻撃の予行演習のようなものであった。次いで本命である金国に矛先を向け、黄河以北の地を支配下に置いた。更にトルキスタン方面に征旅を向け、占領地を大きく拡大した。その頃チンギス・カンは、不老長寿の法を知っていると思われていた道教の指導者を漢土から現地に招こうとした。いくつかの宗派があったが、どの指導者も行くことに二の足を踏んだ。その中で、全真教の指導者であった長春真人こと邱处機一人が招請に応え、73歳の身を押して何人かの弟子と共に西域に向かった。現在の中国北部、モンゴルそしてカザフスタンなどの諸国を経て、一年がかりで現地に着き、大征服者と会談し何度か講義を行った。それはチンギス・カンの意に叶い、全真教保護のお墨付きを得て帰国した。往復に足かけ三年掛かった旅の様子は弟子の李志常が記録し、「長春真人西遊記」として残る。これは当時のモンゴル軍の様子や西域の実情に加えて、通過した国々の地理を知ることのできる貴重な史料として知られている。だが、彼らが進んだ経路が明瞭であるとは言えない。理由は、移動手段が必ずしも明確で無い事、後世に地名が変化した事、現在でも良く知られていない地域を通行している事、などである。二人が最初に面会した場所はアフガニスタン北部と推測はできるが、具体的な地点については定説が無い。旅の経路を知るとは、チンギス・カンの部族統一戦争の実体や、西域への進軍経路を知る上でも重要であり、これらを明らかにすることを本論考の目的とする。

2. 従来の研究

管見によれば、従来の経路図は岩村忍訳「長春真人西遊記」(1)の付図と、白石典之編「チンギス・カンとその時代」(2)の付図の2つだけである。両図は非常に簡単な地図であり、経路の差もかなりある。又、その地に立ち寄ったと判断する理由が書かれていない。中国のweb上でも2つの図を見出したが、図が不明瞭な上、経路を決める根拠もあいまいである。英訳本「The travels of an alchemist」(3)にも図があるが簡単すぎる。

3. 方法

研究が進んでいなかった理由として、1990年頃までモンゴルが自由化されておらず、内陸の情報が不足していたことがあると考えられる。しかし、近年モンゴル国内での考古学的探索が継続的に行われてきて、チンギス・カン時代の拠点のいくつかが明らかになった。また、インターネット環境の発達で、中国、モンゴル、中央アジア等の正確な地理情報を得ることが容易になった。これらの情報を元に、漢原文と岩村本を参考にしながら、立ち寄った地点がどこであったのかを順次確認する。

4. GMap の使用方法

地点と光景の確認、距離測定には Google Map (GMap と略) を活用し、前地点からの移動距離を求めて、本文の日付や日数から、移動速度が適切であるか否かを判断した。進路判断となる道路表示には各種ある。先ず各国が公的に管理している幹線道路であり、路線表示番号が付いている。中国の場合だと、赤 G で示される国道は旧来の大道のようである。緑 G は近年開通した高速道路であり判断基準に出来ない。黄 S 番号は省道で日本の県道くらいである。拡大すると X 番号も見える。これは県道 (中国の県は日本の市くらいを示す) である。

格別な表示が無い道路も多いが、明瞭であれば判断に用いた。拡大すると細いグレーの線も見える。人家のあまりない草原や砂漠地帯などで、現地で時折用いられている経路を表示しているようだ。車両や家畜によって付けられた地面の通行痕も判断材料となる。原本に用いられている距離単位の里は唐里 0.57km と考えた。平面的な移動であればこれで良いが、土地の起伏が複雑なところも多く通行しているの、地形表示で高低差も見て、進路の難易度、山岳の形状、視界の広がりなどを考慮に加えた。

5. 日数計算

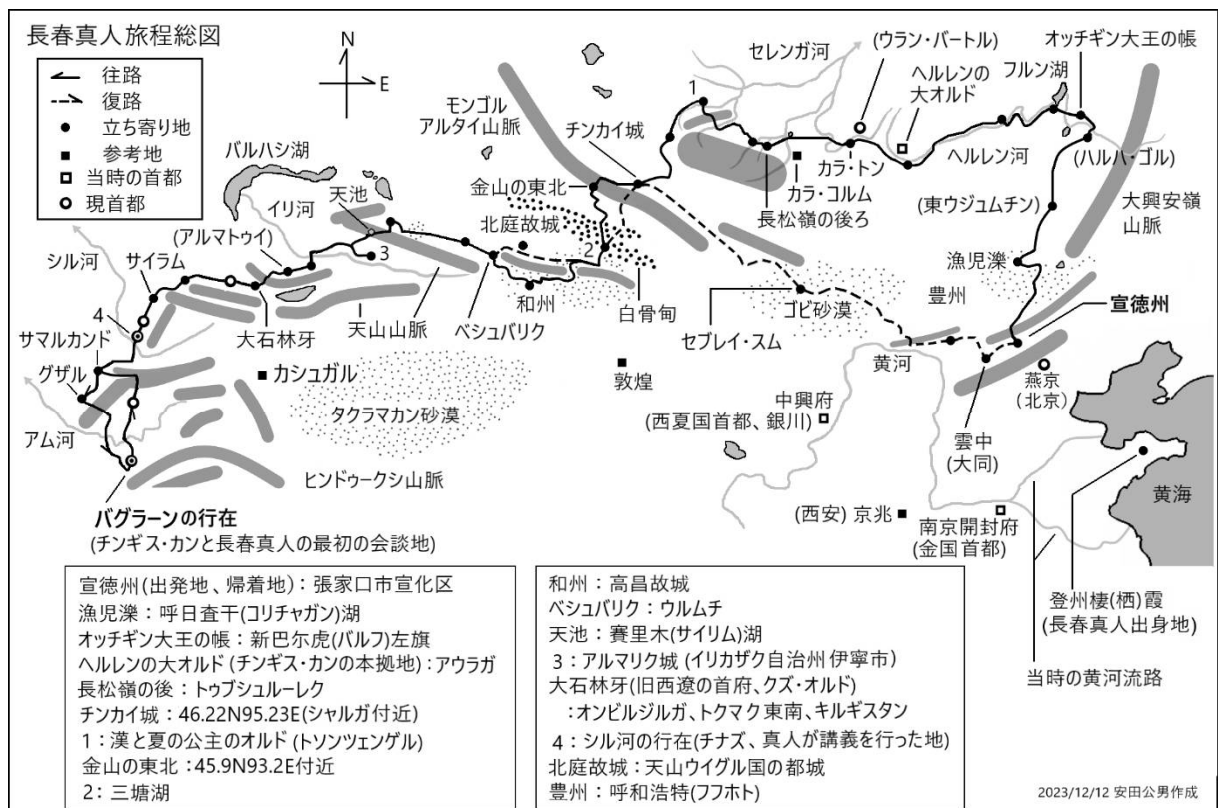
月日は原文のまま陰暦によったので、日数計算には月の大小を考慮にいれなければいけない。しかし、当時の暦の実態が良く分からなかったの、一律 30 日とした。従って、月をまたがった日数計算では 1 日多く見積る事があるのをお断りしておく。

6. 資料

この研究には、GMap の他にも、中国内部の地理情報などをネットより多数得たが、容易にアクセスできるので一つ一つ記さなかった。モンゴルの地名の英語表記方法は用いた資料によって異なっているが、原資料のまま用いた。参考にした資料は末尾に挙げた。

7. 旅程総図

以上の事を元に検討してまとめた総図を先に示す。次に各部分行程を図を入れて説明する。



序章 出発までの経緯

金朝の首都中都（現北京）を陥落させて河北一帯を支配下に置いたチンギス・カンは、1219年には征服活動を西域に転じていた。その最中に、漢土の道教系教団の指導者を現地に招請した。彼らは不老長寿の秘密を知っていると思われていたのである。モンゴル軍には扈従する漢人が多く居たので道教のことを知ったのであろう。だが遠くに招かずとも、モンゴル本土に帰ってから招けば良かったのではなかろうか。近いし政情は落ち着いているので、多くの教団がやって来たはずである。だが、それまで待ってられない、という焦りのような気持ちをチンギス・カンに感じざるを得ない。それは、現地で真っ先に軍門に入ったと思われる旧西遼国の者から、開国者の耶律大石が五十八歳で亡くなり、故土奪還の夢が潰えたことを聞いたからではなかろうか。西域侵攻時に彼と同年である自分のことを振り返って、他人事と思えなかったのだらう。チンギス・カンの生年を元史の1162年とすれば、こういう推測が成り立つ。一方、招請を受けた道教教団の事情はどうだったのであろうか。窪徳忠の論文によって出発前後のまとめると次のようである。

金朝治下の漢土で道教系の教団が新たに起きていた。全真、太一、真大道の三つであった。全真教は王重陽が開祖であり、馬丹陽そして邱処機と続いていた。漢土の宗教団体は反乱や政府転覆の核になることもあったので、国家権力から超然としていられなかった。危険と思われれば容赦なく弾圧を受ける運命にあった。全真教も第二祖馬丹陽の時に弾圧を受けたことがあったが、彼は金国朝廷に参内して講義を行い、保護が得られるように努力した。その努力が実ろうとしていた頃に、金朝はモンゴルに敗れて黄河以南に逃れ、河北は無政府状態に陥った。混乱し苦難に陥っていた民衆を救うために教団の力を維持しようとするれば、征服軍と協力する以外に無い。西域に来て不老長寿の秘法を教えよ、と言うモンゴル皇帝の呼びかけに応じるべきであった。だが、西域までの距離は万里、即ち6,000kmを越える。順調に行けたとしても一年近く掛かる。生活風俗が漢土と大きく異なる土地を通り、戦乱が収まって間もなくの不安定な所も多くある。呼びかけに躊躇し、チンギス・カンが漢土近くに戻ってくるまで待とうとするのが当然であった。

そんな時、全真教団の指導者であった邱（丘）処機一人が招請に応じた。平均寿命五十歳くらいの時代に、七十歳を少し越えていたから充分過ぎるほどの老人であった。なぜ応じたかは、教団の思想と関連しているだろう。全真教は道、仏、儒の三教を融合しており、真功と真行の門を立てていた。この場合の門とは修行目的のことである。真功は自利であり、迷いの無い自己確立への修行である。禅宗と深い関係があった。真行は利他、即ち人々の苦しみを除くように実践することである。邱処機の胸には、大征服者に自分たちの思想を少しでも理解してもらって教団を存続させ、戦乱の世の人々の苦しみを少しでも取り除ければとの思いがあったのだろう。しかし、万一大征服者の気に障れば、切って捨てられることは無くても、現地で野垂れ死にする可能性はあった。真人は、教団の発展が戦乱にあえぐ人々の救済になると信じて、苦難が予想される旅に出ることを決めたのだろう。高弟である尹志平、李志常も同行した。二人とも真人亡き後の教団を継ぐことになる者たちである。漢土での活動は弟子達に任し、この西域行きに教団の命運を賭けたと思われる。

第1章 出発からチンカイ城まで

1. 1 出発→蓋里泊

- A. 長春真人一行はチンギス・カンの招請を受けて、1221年の旧暦2月8日、宣徳州を出発し西域に向かった。弟子18人の他、宣差（道案内人）の劉仲録とモンゴル人案内人4名が同行した。当地に残る弟子の一人は泣きながら馬の口を留めて、「いつ帰られるのですか」と真人に問うた。真人とても確信は無かったが、「三年で帰る」と繰り返し告げた。10日、翠帡口に宿し、翌日野狐嶺を進んだ。散乱していた白骨^注)を見て、弟子の一人は、「帰り道で拾い祭ろう」と言った。
- B. 北に進んで撫州を過ぎ、15日には東北に向かって蓋里泊を過ぎた。その付近の地上を覆うように噴き出ているものは塩であった。初めて二十戸ほどの人家を見た。南には塩池が連なって東北に伸びていた。これより河は無く井戸で水を得ている。南北数千里に渡り大山もない。

宣徳州

一行は燕京、現北京からやって来ているが、実質的な出発地は宣徳州である。現在の河北省張家口市の宣化県で、北京の北西160kmに位置し、漢人の農耕世界から遊牧世界への入り口とも言うべき町であった。後に万里の長城に入る大境門ができたので、モンゴル語でもカルガンと言う名がついていた。門の意味である。一行は漢人なので騎馬が達者とは思えず牛車に乗っているだろう。真人は馬に乗っているようだが、73歳の老齢であるので出発当初だけであろう。現在の国道110を西に進み、国道207に道を変えてほぼ北に進むと急に山並みが迫ってくる。その辺りから北が翠帡（屏）口である。宿泊した地点が分からないが、膳房堡郷 40.96N114.73E が名前からして宿場なので、ここに宿したとする。宣化区中心部から約60kmの距離がある。3日で来ているので2(月)/10(日)着の20km/日(d)の移動速度となる。ここから北へ張北県方向へは20kmほどの峠道になる。これを越えると当時は遊牧世界であった。

野狐嶺

翌11日、北に峠道を登ると達する。散乱していた白骨は、十年前に金軍がここでモンゴル軍に大敗した時のものである。それまでも戦場はいくつか経てきたはずだが、死者の供養が記述されているのはここだけである。金軍敗北の程度はよほど大きかったのだろう。宿泊した地点はまだ撫州、即ち現在の張家口市張北県に達していない。県中心の5kmほど手前にある野狐嶺要塞軍事旅遊区の地点 41.11N114.72E だったとすると、前日から約18kmの移動になる。張家口市の標高700mに対し張北県は1400mと、高度が700mも上がるので速度が落ちているのだろう。速度からして牛車行である。

蓋里泊

中国のネットサイトによれば、内蒙古自治区太仆寺旗の南巴彦査干淖尔（南バインチャガン・ノール）と哈夏図淖尔（ハシャト・ノール）とある。ノールは湖の意で、即ち泊。これらは現在の国道の南にあるので、B.の塩池はこれらの事であろう。他にも国道近くに九連城湖

や烏蘭（ウラン）湖など、湖が多くある。蓋里泊はそれらの総称だろう。現在の国道 207 を進んで烏蘭淖尔を過ぎると太仆寺旗の町がある。太仆寺（タイプス）はモンゴル語の塩、Dabs からきた名である。2/15 に到着したのはここと推定する。野狐嶺から 105km ほどである。野狐嶺出発を 12 日とすると 4 日掛かっているので、速度は 26km/日となる。ルブルックの旅行記にはモンゴル人の牛車の速度として、人がゆっくり歩くくらい、とある。時速 4km 程で 1 日 7 時間程度進むとすればこの速度になる。ここから馬に乗り換える。先々の旅に乗馬できることが必須になるので、不得手の漢人一行が練習を始めたのであろう。

1. 2 蓋里泊から魚児澳

明昌の界

東北千里の砂漠

明昌の界付近に広がる沙漠を渾善達克（フンシャンダク）砂地と言う。太仆寺旗から国道 207 を進み、東北に沙漠が広がるという表現にふさわしい地点を図 1-2 で示すと、沙漠の入り口となる P1 地点、42.45N115.83E か、完全に沙漠環境になった P2 地点の桑根達来鎮かである。それぞれに到着した日数を 6 日、7 日と言っているのであろう。記述に従い、北に向かう国道 207 と明昌の界の接点あたりから沙漠を見るとほとんど東方向である。実際の地形を見ると、C.と D.が前後入れ変わっているようである。砂漠の広がりやを千里としている。唐里とすれば 570km になるが、実際の広がりやは 130km 程度である。山脈を越えた東にも砂漠は広がっているが、そこまで入れても千里にならない。単に遠くまでという意味だろう。他書でもそう言う例があるし、B.の数千里も同じと思われる。

魚児瀾（ギョジラク）

現在の定説は達里諾尔（達里泊、ダライ・ノール）を指す。しかし、湖の南部から行くとしたら水の乏しい道であり、達里泊の湖畔近くには村落が少ない。街道からも外れていて行きにくい。付近で唯一大きな町である達来諾日鎮（ダライ・ノール鎮）で農業は行われているようだが、湖畔から東に 20km も離れていて、漁業が生活の一部であるとは考えにくく、地理的な理解が困難である。ところが、最近の白石の説(5)によれば、魚児瀾はコリチャガン湖（呼日查干淖尔）である。現在は 2 つに別れた湖の西が干上がりかけているが、当時は水が豊富であった。百数十メートル四方の町遺構が湖の東北部、43.4803N115.0887E 地点に見える。ここは湖に近接しており漁業が生活の一部であることを一行は実見できるし、農耕跡も見える。周囲の通行痕も明白である。達里泊を魚児瀾とした場合の問題が解消されるので、筆者もこの説が正しいと考える。標高は 1,100m 台である。なお、このような壁に囲まれた町を中国語では城と呼ぶ。後で言及するチンカイ城もそうである。

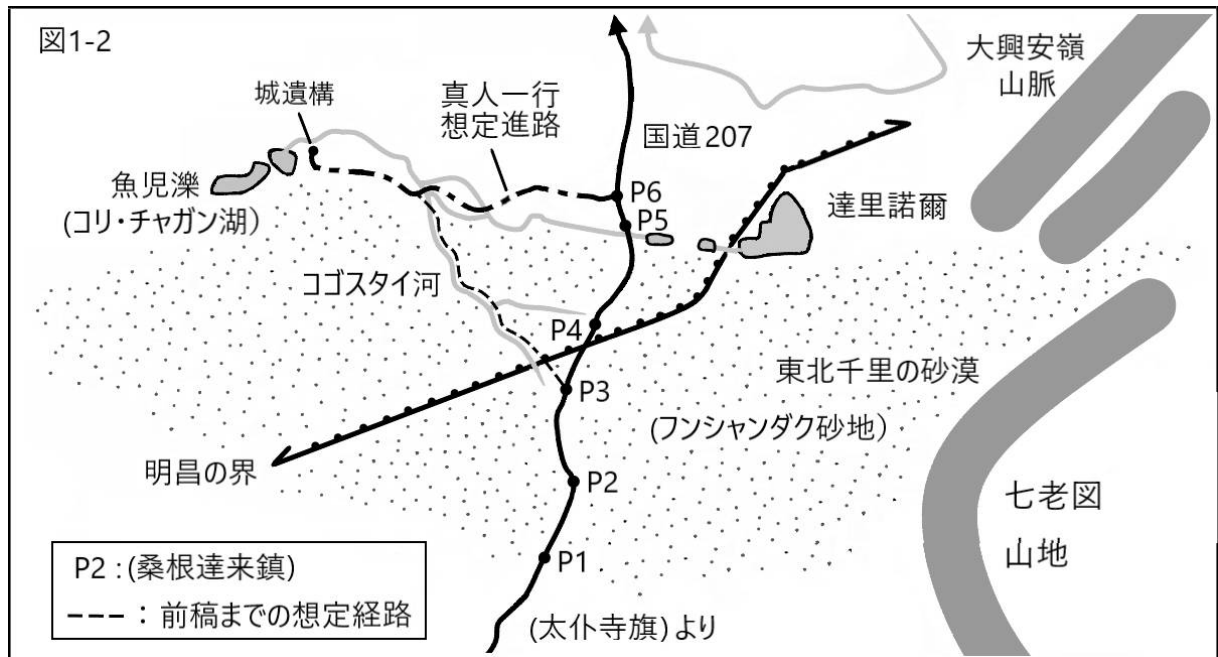
魚児瀾に至る道

以前は図 1-2 の国道 207 の P3 地点、42.95N115.94E から西に向かい、コゴスタイ河（高格斯台郭勒）の本流沿いに進む道を想定した。だが、再度見直すと道の屈曲が激しく通りにくそうであるし、道が明瞭で無い箇所もある。漢人一行が騎馬に慣れていないことを考えると、国道 207 をそのまま北に進み、P6 地点、43.35N116.11E に行く。そこから西へ向かう経路表示に従い魚児瀾に進んだのではなかろうか。太仆寺旗出発を 2/16 とすれば、3/1 着であるから 16 日間の旅である。大砂漠までの 6、7 日と、明昌の界を越えるまでの 5 日では 11 か 12 日しかない。P6 地点から魚児瀾までの日数が文に抜けている。

太仆寺旗からの移動距離と速度

今回想定した図 2 の経路では、太仆寺旗から魚児瀾までの総距離が約 290km となる。日数 16 日で踏破しているので平均速度は 18km/d となり、牛車行より遅い。この速度だったとすると、太仆寺旗から P2 地点までは 115km なので 6.3 日の計算になり、D.の記述に合致する。明昌の界を出た地点を P4 地点、43.06N116.03E にある集落だとすると、P2 から 55km ほどであるから 3 日ほどしか要しないはずである。5 日の日数だと速度が遅すぎる。これには 3 つの解釈ができる。1 つ目は単純に、道の起伏が激しくて速度が落ちた。2 つ目は、魚児瀾方面に方向転換する P6 まで進んだ。3 つ目は、記録間違い。1 番目の考えだとすると、P4 から P5、P6 を経て魚児瀾まで約 130km ある。ここを 4 日とすれば、速度は 33km/d、5 日とすれば 26km/d となり、それまでより早過ぎて、あり得ない数値である。2

番目の考えとすると、P2、P6 間は約 90km なので、1 日平均 18km の速度となりそれまでと同じである。また、P6 から魚児楽までも 90km なので 5 日の日数となり、不足日数もなくなる。以上考え合わせると、C.の記述は次のようだったと思われる。「地には樹木なくただ枯草のみ。砂丘が重なり山を隠す。明昌の界を越え、馬で行くこと五日で砂丘を抜けた」。慣れない騎馬行と景観の異様さで記述が混乱したのであろう。旅の速度は 18km/d である。太仆寺旗からの 16 日間は、漢人一同の乗馬練習の入門段階だったと思われる。



1. 3 魚児楽→ヘルレン河

- F. 3 月 5 日魚児楽から東北に進んだ。四方にははるかに人煙があつたが、それはみな黒い車と白い天幕であつて、水草に従い放牧していた。辺り一面は平らな湿地で、小さい木さえない。周りに見えるのは黄色い雲と白い草のみである。
- G. 途を変えずに行くと二十余日で砂漠に一条の川を見た。ヘルレン河に流れ込んでいる。
- H. 川を渡って北に 3 日進んで小砂漠に入った。4 月 1 日オッチギン大王の帳に着いた。氷が溶け始めた。7 日大王に謁見した。
- I. 17 日に大王より牛馬百余頭と車十台を贈られて出発した。西北に進んで 5 日でヘルレン河に着いた。そこは河水が溜まって周囲数百里の湖水をなしていた。
- J. 河の南岸に沿って西に進んだ。5 月 1 日、川の南岸にいる時に日食を見た。ここで水流は東北に向かう。

砂漠の一条の川

途中の風景描写が少ないので、先にこの川から考える。これは方向、経過日数、描写からして大興安嶺山脈から流れてブイル湖に流れ入るハルハ川と思われる。川に達したとか出たではなく、川を見た、と書かれているのは、川より 40~50m の高台になっているモンゴル側に到着したからこそ書ける描写である。川はブイル湖に入り、ウルシュン川を通じてフル

ン湖、即ち、ヘルレン河の終着点に流れ入る。現在はフルン湖から直接流れ出ている水路はないが、増水期は北方のエルグネ河と接続するようである。当時は常時接続していたとすれば、フルン湖もヘルレン河の一部と見なされるので本文の表現は間違っていない。ハルハ川の近くであって、南からの目標になる集落といえば、モンゴルのハルハ・ゴル (Khalkh gol)、標高約 700m である。そこから川を渡り経路表示にしたがって 30km ほど行くと、現在の中国ーモンゴル国境になり、日本にも関係が深いノモンハンがある。

オッチギン大王の帳

オッチギン大王とは、チンギス・カンの末弟テムゲ・オッチギンのことである。テムゲが本名で、オッチギンは竈の主の意味である。末弟が家を継ぎ父母の面倒を見ることからこの名があった。兄の征西中ここに居て、モンゴル本土と占領地の管理をしていたのである。彼も真人の話を書きたかったが、兄を差し置いて聞くわけには行かなかったようだ。

小砂漠から大王の帳までの日数は、後の事から考えると 0.5 日以内であろう。騎馬で一行の到着を前日までに知らせておいて、翌日の午前に入って行き、挨拶、歓迎会となる。ただこの時彼は忙しすぎたのか不在であったのか、到着後の謁見は 6 日後である。ハルハ・ゴルからの日数は 3.5 日となるので、北にそれくらい離れていて、地形の特徴がある所を求めると、中国内蒙古自治区の新巴爾虎左旗、48.22N118.26E である。東部に砂漠が広がり南にも少しある特徴が一致する。ハルハ河を渡ってノモンハンまで 28km、そこから新巴爾虎左旗までは 67km。計 95km を 3.5 日だから、27km/d の速度になり、牛車行と推測される。乗馬訓練も並行して継続していたはずだ。3/5 に魚児楽を出てから 27 日間の旅は乗馬の初級段階であろうか。なお、この辺りは標高 600m 強である。ここからの出発は、謁見から更に 10 日後となる。大がかりな準備だったのだろう。

ヘルレン河

河が湖水となっていたというのだから、現在の河口まで進みフルン湖を見たのだ。新巴爾虎左旗より道路を西北にたどって河口近くにある現在の呼倫蘇木（フルンスム）辺りに達したのだろう。新巴爾虎左旗から 125km あり、4 月 17 日に出て 5 日の旅だから到着日は 4 月 21 日である。住民が魚を取っているのをゆっくり眺めているので、5 日目はかなり早く着いたのだろう。実質 4.5 日とすると、27km/d の速度となり牛車の速度である。ここで重要なのは、本文の日数と妥当な速度で、ヘルレン河口という推測の入らない地点に至ったことである。従って、ハルハ・ゴル集落を経て新巴爾虎左旗に到着地としたことも正しかったと考える。

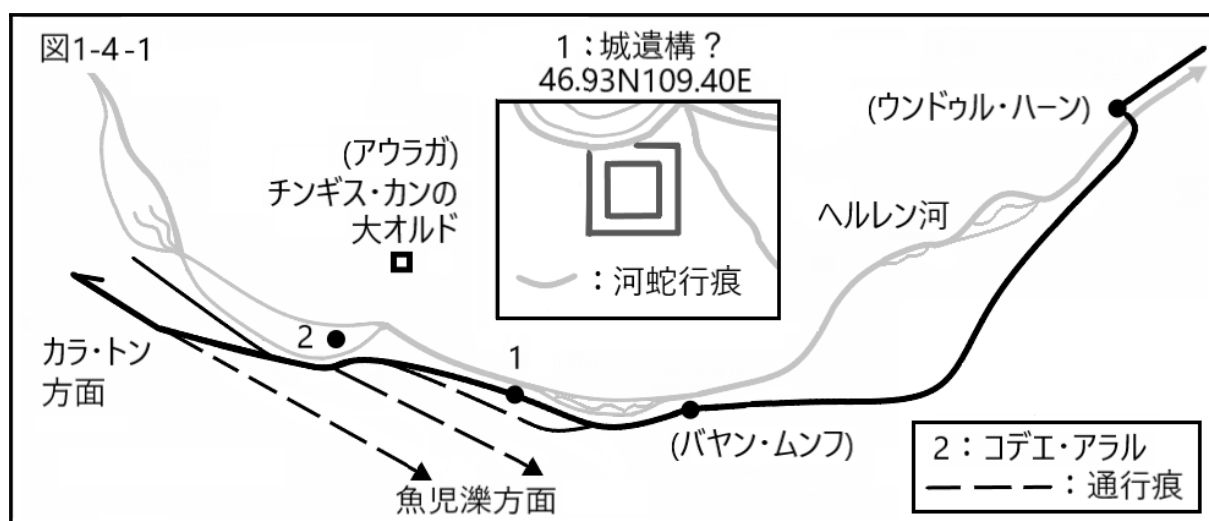
魚児楽からハルハ・ゴルに達した経路

ここで元に戻り、魚児楽からハルハ・ゴルまでの経路を考える。出発時には東北に湿地のある草原を進んでいるから、現シリン・ゴルに向かったのだろう。湿地を越えた 43.62N115.60 地点から東北に進む道があり、43.80N115.51E 地点から経路表示に繋がる。110km の距離である。シリン・ゴルからは東ウジュムチン旗に向かったはずだ。現在の道路標示に従うと 2 つの可能性がある。1 つ目は省道 307 と 204 で西ウジュムチンを経る経路だが、進行方向が途中で大きく変わり、道を変えなかったという記述と異なる。2 つ目はシリン川の西を伸びる省道 101 経由である。だが、この道は途中の集落が少ないし、直線的な部分が多くて、近年出来た道路らしく思える。シリン川の東に道路標示と激しい通行痕が見えるので、この

- K. 16 日行程で河は曲がり西北の山に去っているが河源は分からない。西南には泊駅路が走っている。蒙古人は真人の到着を喜び、黍を 1 石 5 斗献上し、真人は橐を与えた。
- L. 10 日後、夏至になった。このころから急峻な大山が見え始め、西の方は山や丘が増え、人烟も多くなって来た。(モンゴル人の風俗についての記述あり)
- M. 更に 4 日行程の後、西北に進んで川を渡った。東西の方向に故城の遺跡があるが、基礎跡は新しく見え、街路ははっきりしている。契丹人が建設したものだろう。

黍と橐を交換した地点

北西からヘルレン河が流れて来る地点は、47.0N109.2E 付近である。近くにはチンギス・カンの宮殿跡アウラガがある。白石の書によれば、ここに住む人々のために黍を栽培していたとある。先ず候補に上がるのは元朝秘史にあるコデエ・アラルである。そこに着いたとすると、チョイバルサンから河沿いに 475km あり、16 日行程なので 30km/d の速度となる。河沿いの水草に恵まれた平坦な道のようなはあるが、同じ条件のはずの今までの速度より早いし、次の行程速度が遅くなりすぎる。もしも 20~30km 東、即ちバヤンムンフとの中間あたりであったとすれば、450km で 28km/d の速度となる。丁度その推測地点に約 230m 四方の町らしき遺構が見える。ここに到着したのであろう。標高 1,100m 程である。5/2 にチョイバルサン出発で 5/17 に到着である。西南にある泊駅路は魚児楽への駅伝路とのこと。現代のモンゴル道路地図で見ても、この辺りからコリチャガン湖方向に向かう 2 本の道路痕がある。これが昔から漢土への道として知られているテレゲン道であろう。



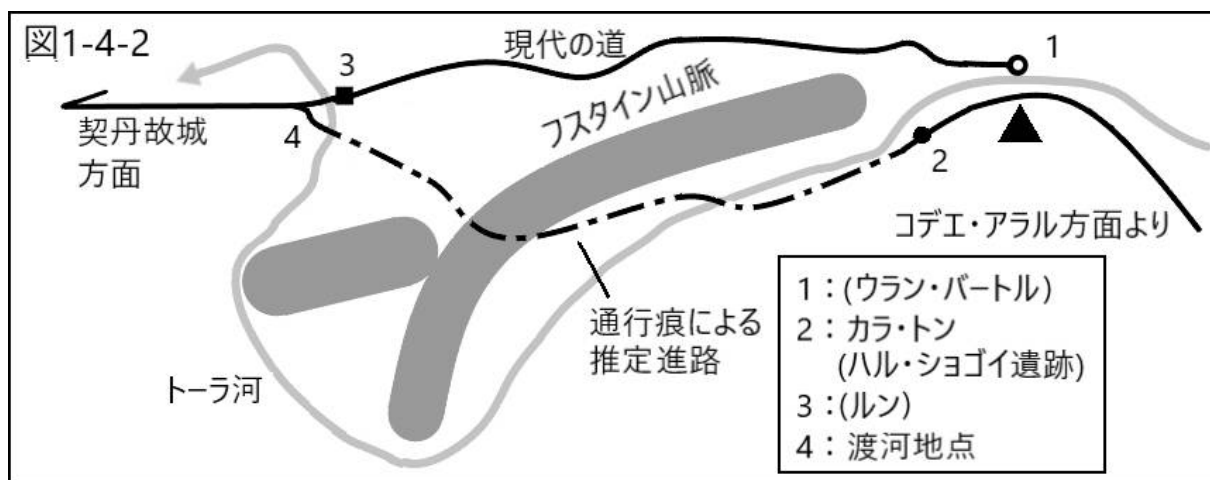
人烟が多くなって来た地点

前図 1 の地点から 10 日間を 28km/d で進んだとして 280km になる。その範囲で人の多い場所を求めれば、ケレイト部族の根拠地として有名だったカラ・トンである。そこはウラン・バートル市の郊外にあるハル・ショゴイ遺跡(3)だとされていて、現在の市の中心より 20km ほど西にあるソングノ保養所の近らしい。47.85N106.69E 地点であろうか。標高は 1200m 強である。地勢の記述も実際と合致する。少し手前でその辺りを見て、「人烟が多くなって来た」と言っているのだろう。即ち現在のウラン・バートル市の西で夏至であり、翌日カラ・トンに到着したのだろう。推定される夏至日の 5/28 に 1 日加えた 5 月 29 日が到着日で計 11

日間の旅だった。ただ、到着日の観察描写が多いから、かなり早く到着してくつろいでいる様子であり、実質 10.2 日ほどの旅だろう。前地点から、トーラ河の南岸を経てもゾーンモド経由で行っても 265km ほどなので、26km/d の速度となる。今までより少し遅いのは、高低差が 200～300m ほどの峠道を 2 つほど越えた為であろう。前節の宿泊地をコデエ・アラルだとすると、235km の距離なので速度が遅くなりすぎる。

川を西北に渡った地点

ウラン・バートルの真西にあるルン（Lun）の町でトーラ河が大きく屈曲している。その辺りを渡ったのに違いない。渡河後、東西に契丹人の建てた故城を見たところがあるが、これらはウラン・ヘレム、チン・トルゴイ、ハル・ブフの遺跡として知られており、GMap 上でもはっきりと確認できる。遼国建造の十一世紀の城で、史書にある防州、鎮州、維州に比定されている。現在の道はルンの町から真西に河を渡し、方向が記述と異なる。その 8km ほど南の河の両岸に、北西方向の通行痕が確認できる。そこへの道は東南の山地から伸びて来ている。であれば、カラ・トンから先ずトーラ河沿いに南西に進み、フスタイン（Khustain）山脈を横切って再びトーラ河に出て、北西に渡ったのであろう。距離はカラ・トンから 135km あり、4 日間掛かっている。速度が 34km/d となって、牛車では速すぎ、騎馬では遅すぎる。日数 4 日を 5 日の間違いとすれば牛車の速度として 27km/d とちょうど良くなり、こちらの可能性が高いように思う。カラ・トン出発が 5 月 29 日で、4 日かかったとあるが実際は 5 日だったと考えると、6 月 3 日にルンの対岸に着いたことになる。



1. 5 故城群→長松嶺の西

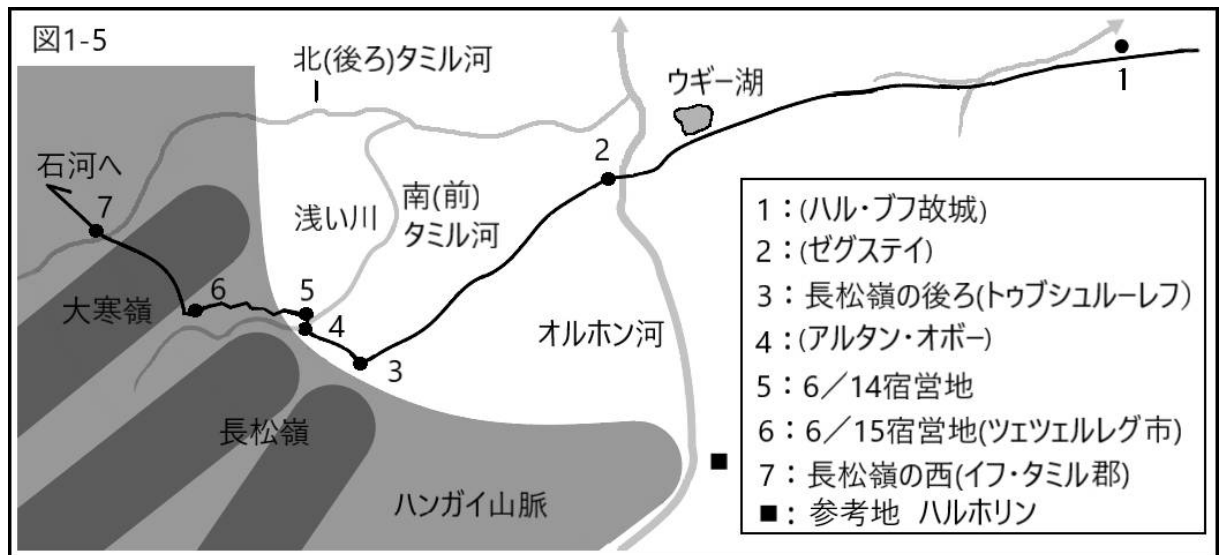
- N. 六月十三日、長松嶺の後ろに宿営した。松や檜の類が森森と茂り、谷にかかる雲は日を覆っている。樹木は山の北側の溪谷に多く、南側には少ない。
- O. 十四日、山を過ぎ浅い川を渡ったが気温は極めて低い。平地に宿した。十五日は暁に起きたが、天幕の周りには薄氷が張っていた。雨や雹にたびたび遭い、山道は曲がりくねっていた。
- P. 十七日、長松嶺の西に宿した。初伏の節であつたが朝暮には氷霜が3度あり、河水は真冬のように冷たい。地元の人言う。「今年はまだ温かい。平年はまだ5、6月は雪がある。真人はこの山嶺を大寒嶺と名付けた。

長松嶺の後

故城址を過ぎてからの方角と光景描写がないのは、特徴の無い草原をひたすら移動していたからだろう。六月十三日から木々が多い長松嶺という山名が出てくる。かなり南に下って、ハンガイ山脈の中心部の北側に近づかないと書けない表現である。経路を推定すると、一番西の故城址ハル・ブフから西へウギー湖の南に向かい、オルホン河を渡り現在のゼグステイ (Zegstei) の町を経る。ハルホリナーツェツェルレグ (Tsetserleg) を結ぶ路線に出てから、少し先のトゥブシュルレーク (Tuvshruulekh、47.38N101.91E) 村に行く。ここが長松嶺の後の地と推定する。6/4 出発で 6/13 着であるから 10 日間の旅である。280km の距離があるので速度が 28km/d となり妥当な速度である。トーラ河渡河まで本文通りの 4 日間であれば 6 月 3 日出発なので 11 日間となり 25km の速度となる。平坦な土地にしては遅いので 6 月 4 日渡河と判断したのは正しかったようである。木々の濃さと山が重なっているのを間近にしているし、泉もあることからして、ここが長松嶺の後の地点にふさわしい。少し手前の、現在の道路付近で停まった方が次の旅に都合が良いであろうが、山の後ろには見えない。この標高は 1,650m ほどで、ゼグステイより 300m ほど高い。

六月十四日以後の地点

トゥブシュルレークの村から 16km 程西北に進むと、ツェンヘル郡アルタン・オボーの北で川を渡る。N.で言う浅い川であろう。この川は、南（又は前）タミル川で、北へ流れて東西に流れる川に合流する。そちらが北（又は後）タミル川である。6/14 の宿営地を、川を渡った 47.45N101.75E 地点と推定する。そこからツェツェルレグに向かう道は記述の通り屈曲が激しく、宿営できるところがないので早めに停止したのだろう。次の日は 22km 進んでツェツェルレグ (Tsetserleg) で宿することになる。その先は山越えてイフタミル (Ikhtamir) 郡である。距離は 28km ほどであり、平地なら 1 日の距離だが、山越えをするので 2 日かかり、17 日の早くに着いたと思われる。ここが長松嶺の西に当たる。この先に集落はしばらくなく山道ばかりが続くので、それ以上進まずに準備を整えたのだろう。越えてきた山塊は長松嶺の後ろで見た嶺筋とは別の嶺筋だったので大寒嶺と新たに呼んだのだろう。長松嶺の後ろから 66km あるので平均速度は 17km/d となるが、一日中進んだのは 15 日と 16 日だけである。到着日も入れて 5 日間のこの区間だけが日付も入れて妙に詳しく書かれているのも、14、17 日の移動距離が短くて時間的余裕があったからと考えられる。牛車で来ているが、山道を進み、河も何度か渡っている。この区間は乗馬訓練の中級から上級に進んだと言えるだろう。



カラコルムを経由したか

カラコルム、即ち現在のハルホリン (Kharkhorin) は当時征西の兵站基地として機能していたようである。トーラ河を西北に渡った地点から 280km と見積もられるので、6/13 の到着地をここと考える事もできる。しかし、ハルホリンの位置は木々が濃いように見えないし、山深い所であれば都になるはずもない。この後の 4 日間の行程もうまく解釈できないので、可能性は無い。

1. 6 長松嶺の西→オールド

- Q. 山道は曲がりめぐって、西北に行くこと百里にして又西北に向かい初めて平地にでる。石河があり、長さ 50 余里、河岸は深きこと 10 余丈。水の音は清冷。山は西に連綿としている。
- R. 更に 5,6 日の間、峰はめぐり、道は転じ、樹木の繁茂している連峰の下には溪谷の水が流れていた。
- S. 28 日、オールドの東に宿し、皇后に奏した。川を渡って来るようにとの仰せがあった。この川は東北に流れており、渡って南岸に停めた。漢と夏の公主に贈り物をもらった。

西北又西北の道

イフタミルから山道が北西に伸びている。それを進むと道が二股に分かれるが、どちらを行っても小さな盆地のような所 (47.83N100.86E) に着き、西の隅に小さな集落がある。ここまで 50km の道が、西北に行くこと百里にして、の部分だろう。道は再び西北に向かう。

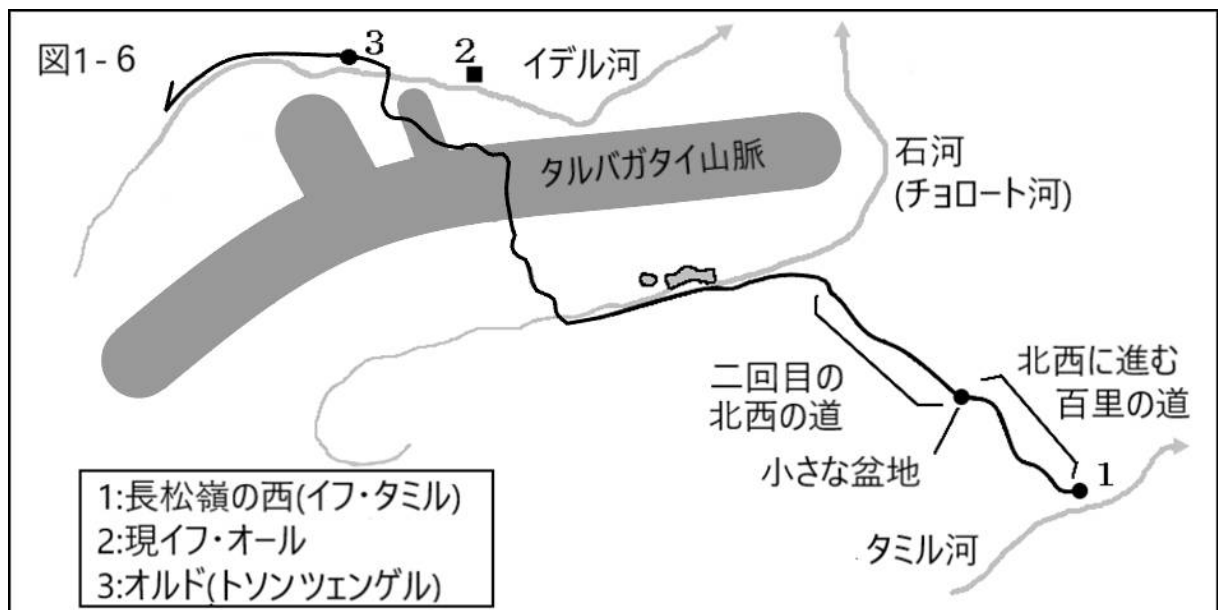
石河

行くこと 60km ほどで平野に出ると、チョロート川 (Chuluut Gol) が流れている。モンゴル語の意味は「石の多い川」であり、まさしく石河である。近年は魚釣り、溪流下りなどで観光地化されている。類似した景観はここ以外にもあるようだが、英語のネットサイト(8)で見ると、“Chuluut canyon stretches 25 km in long, above 20 m in high.” の表現がある。原文の「長さ五十余里」は $52 \times 0.57 = 30\text{km}$ 、「川岸の高さ十余丈」は、 $10 \times 3.1\text{m} = 31\text{m}$ 以上であるから、長さはよく一致し、高さも誇大ではない。チョロート川そのものの長さは 400km

を越えているが、代表的な景観の所は 100km 程度らしい。その中でも特徴的な場所の距離が五十余里、英語サイトでいう 25km なのだろう。石河はチョロート河に違いなく、西北に進む事を 2 回繰り返してやって来た路の特徴と共に、石河への出発点であった「長松嶺の西」が、現在のイフタミル以外にありえないことを証明し、長松嶺の後ろの地点がトゥブシュルレーフであることの蓋然性を高めている。この河は標高 2,000m を流れている。

オルド

石河に着いてからの方向が書かれていないが、現在の街道通りに西に進んだのだろう。道は北西に向かってタルバガタイ山脈へと分け入る。Q.で、「山は西に連綿として続く」とあるのはこの山脈の眺めで、P.の描写は山脈を横断している光景である。山の嶺筋は多くて複雑だが、標高差は 1,000m ほどとあまり高くない。山脈を越えるとイデル川に出る。川の流れは、全体としてみれば東北に向かいセレンゲ川に合流する。オルドはイデル川沿いにあったはずで、それらしい所はイフ・オール(Ikh uul)かトソンツェンゲル (Tosontsengel) の町である。現在の街道はチョロート河から先にイフ・オールに向かうが、少し前のモンゴルの地図を見ると、トソンツェンゲルに向かう道の方が太く書かれている。こっちの方が昔からの道筋だったようだ。すると、オルドはトソンツェンゲルにあったのだろう。ここの標高は 1700m 台である。イフタミルから 305km ほどである。山道でも 25km/d の速度とあまり落ちていないのは、峠が低いからだだろう。河を南に渡ってオルドに着いたとあるが、現在の町はイデル河の北岸にある。そうするとその時期オルドは南岸に設営されていたのではないか。一行は河を越えて北岸を進んでいたのだから、渡り直したと思われる。28 日に皇后に奏したのだから、オルド到着日は 6/29 であろう。イフタミルを 18 日に出たとして、12 日を要したことになる。このオルドは漢と夏の公主という異民族のカトンのものであった。漢の公主とは金の七代皇帝であった衛紹王の娘、夏の公主は西夏の七代、襄宗李安全の娘であろう。彼女らはモンゴル本土の奥深くに留め置かれて、幽閉のような処遇を受けていたと思われる。懐かしい本国の著名人一行が来たので随分と歓待している。



1. 7 オルド→故城址

- T. 7月9日、西南に5,6日進んだ。山上に雪があり、山の下にはところどころに墓があった。高い所には陵墓があった。更に2,3日にして一山を過ぎた。その高峰は削ったごとく、松杉が鬱然と茂り湖があった。
- U. 南に大溪谷を出ると一水流が西に流れ、雑木の林が河の水に映り、ニラが茂っていた。
- V. 狭い道を行くこと数十里にして北に故城址曷刺肖（uliastai）があった。

西南に向かう

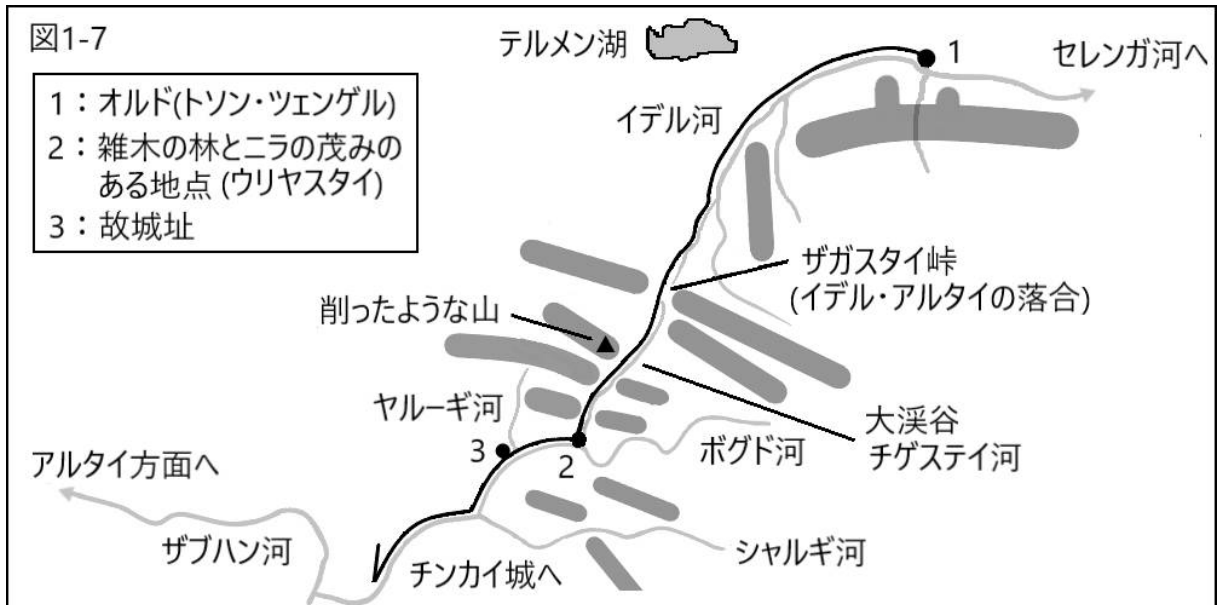
今まで進路方向については西か西北しか出てこなかったが、南が初めて出て来る。今までも南に進んだ事はあったが述べていないのは、その先はまた西か北に進むことが分かっていたからだろう。進行方向がここから大きく変わると言う認識が一行にある。イデル河に沿って道形に南に向かえば東西に標高 2600m 以上の山で挟まれたところがあり、ザガスタイ（Dzagastay）峠という。標高は 2,000m である。北に流れるイデル河の支流と、最後には合流してアルタイ山方面に向かうチゲステイ河が隣り合っているので、史書にはイデル・アルタイの落合の名がある。両側の山は標高 2400m 級であり、この季節に雪が積もっていて不思議ではない。更に南に進むと西の、48.00N97.04E に 2900m 地点に高峰がある。一行から見る東面に、頂上から麓近くまで続く大きなV字形の切れ込みがあり、南面も切り立っている。これが雪を被った削ったような山であろう。現在、湖らしいものは見えないが、あったとすれば 47.93N97.03E 地点であろう。この辺りから谷巾が広がっている。ここが大峽であろう。

雑木の林が河の水に映り、ニラが茂っていた地点

チゲステイ川はボグド川に合流する。これが「一水西流」のことであろう。川の合流点に現在のウリヤスタイ市があり、雑木の林とニラの茂みがある地点だろう。当時も駅亭があったのかも知れない。標高は 1,800m 近い。不可解なのは、ここに来て経過日数が、「5,6 日進んだ」、「更に 2,3 日にして」とか急にあやふやになって来ていることである。長い旅で李志常に疲れでも出たのだろうか。この行程の矛盾は後述。

ウリヤスタイからの進行方向と故城

ボグド川北岸の狭い道を川に沿って西に進んだのだろう。しばらく行くと北からヤルーギ川が合流する。それを越えて直ぐの 47.70N96.62E 地点に 400m 四方の城遺跡のようなものがある。市中心から 21km ほどの地点なので、数十里を 40 里前後とすれば距離が合う。この故城遺跡の南門の前を通過したのだろう。この遺跡について知りたいが情報が得られない。



1. 8 チンカイ城へ

- W. 西南行して砂漠を 20 里ほど進んだ。
- X. ウイグル人が水を引いて麦畑に灌漑しているのを初めて見た。更に 5,6 日して山嶺を越えて南に進み、モンゴル人の宿舎に泊った。朝早く出発したが、南の方には山脈がうねうねと連なり、山嶺には雪がある。駅伝の吏が言う、「あの山の北に田鎮海のバルガスンがある」
- Y. 7 月 25 日、漢人の工匠たちが次々と迎えにきた。金の章宗の二妃と漢の公主の母が相迎えた。
- Z. 翌日、阿不罕山の北で鎮海が出迎えた。

20 里進んだ砂漠

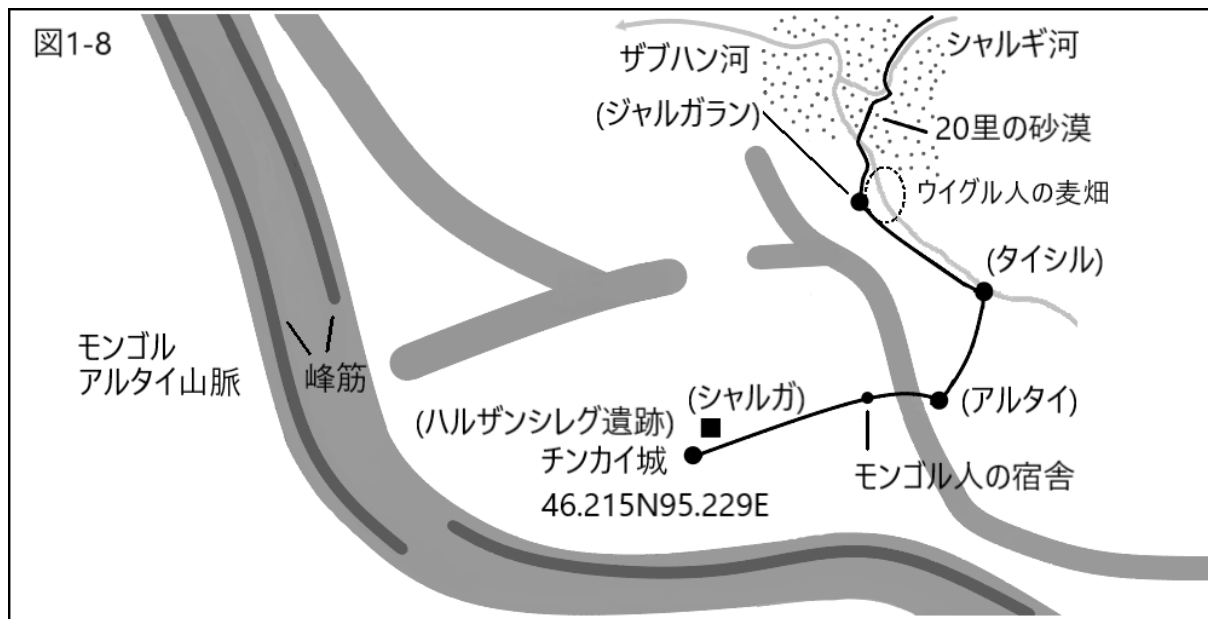
ウリヤスタイを出てからボグド河に沿って下るとシャルギ川に合流する。川は再び南西に流れているので更にそれに沿って進むと、川が北西に屈曲してザブハン(zavkhan)川に合流する地点がある。ここに二つの川に挟まれたような形で砂漠がある。それを南西に横切れば早くザブハン河に至る。距離は 10km 程だから、20 里ほどという記述に合致する。何本か通行痕が見えるが、川を渡って砂漠に出るまでの経路と、砂漠からザブハン河を渡る経路がハッキリしない。水量の少ない河なので、かなり色々な個所で自由に渡っているようである。

ウイグル人の麦畑

この位置はザブハン(zavkhan)川流域のジャルガラン(jargalan)周辺と見なされている。そこから、タイシルの町に向かうのが現代の道路だが、アルタイ市に向かって南下直行する道も見える。タイシル経由だと距離が 130km となり、直行すると 110km になる。5,6 日で到達したとする記述がある。直行路では短すぎる。水の便も考えるとタイシル経由だったと思われる。現在 46.37N95.98E 地点に見える建物は、X.にあるモンゴル人の宿舎と同位置と思いたい。駅伝の吏の言葉は、ここを出発した時のものだろう。

チンカイ城到着

チンカイ城の半日ほど手前で漢人たちが出迎え、鎮海は貴人への礼として城門を出て一行を出迎えたのだろう。即ち、7月26日に真人一行はチンカイ城に到着したのである。城の位置は近年明らかになっており、シャルガ近郊のハルザンシレグ遺跡、46.2154N95.2285Eである。ここは、南北80×東西160kmほどの盆地で、遺跡の標高は1,000mほど。周囲の山との標高差は1,000mを越える。7月9日オールド出発であったから18日の旅であった。



移動距離と速度

オールドのあったトソンツェンゲルからチンカイ城まではほぼ500kmあるので、速度は27km/dとなる。前節のオールド、ウリヤスタイ間の距離は185kmなので27km/dの速度で7日要したはずである。日数が5,6日とか2,3日とかあやふやだったが、両方の最小日数、7日で着いたはずである。5日というのはザガスタイ峠を越えるまでの日数であろう。宣徳州出発から総距離3,000kmほどを5カ月と19日で踏破した訳である。魚児楽、オッチギン大王の帳、オールドでの滞留日数があるので、平均速度は18km/dとなる。乗馬訓練は終了した。

この後の旅についての提案

真人は老齢である事をもって、鎮海に対しこの地でチンギス・カンの帰還を待つことを提案する。李志常の記録の乱れからしても、半年になろうとする旅に一行は相当に疲れていたのに違いないが、鎮海は主の通達があるので絶対に西域に向かわねばならないと告げる。それに従い、一行は人員を9人減じ、残った者はこの地に道観を立てて真人たちの帰還を待つ事にする。再度旅立ったのは8月8日であった。更に3,000kmを越える旅をして、真人一行がチンギス・カンに出会うのは翌年の4月5日、宣徳州を出発して一年二カ月後となる。

1. 9 第1章まとめ

以上検証して来たように、可能な限り原文を忠実に読み、グーグルマップで実際の地形と比較しながら経路地点を求めた。街道は自然地形に左右されるが、現在も大きくは変化していないようである。現代の主要道路と異なる経路を推定した部分もあるが、古地図や明瞭な

通行痕を地図上に確認して行った。だが、現在残る痕がいつの時代のものかとか、街道の変遷などの調査は更に必要である。6 年前と比べて、中国内の通行痕が薄くなっている部分があった。昔の街道がしっかりとした形で残されていれば問題ないのだが。

① 西遊記の表現の傾向

「～を過ぎた」との表現がよく出て来るが、これは、～を過ぎて 10km ほど進んで宿泊した場合に用いられているようである。また、河川はいくつも渡ったであろうが、渡ったとはほとんどの場合書かれていない。「川を渡った」と表現されている例は、川を渡って直ぐに宿泊した場合が多いようである。又、数日間滞在した場所を除き、宿営した土地の人たちとの交流や観察を記した個所がいくつかある。ヘルレン河口、ヘルレン河変曲点付近、カラ・トン、長松嶺の後ろと西である。これらの地点には恐らくその日の早くに着いて、半日近い時間のゆとりが出来て交流や観察の記録になったものと思われる。これらの行程は、到着日を 0.5 日ほど短く見る必要がある。

② 速度

地点と経路を推定して距離を求め、一日当たりの速度をもって、推定の妥当性の基準とした。速度は 25～28km/d の範囲にあり牛車行と推測された。従来、牛車の速度は種々の文献で 20km/d を少し超える程度とされているが、20km は旅に慣れない出発後の数日だけで、思いのほか早かった。時速 4km で一日 7 時間進んでいる計算になる。チンギス・カンによって招聘されたという特殊事情があり、宿駅ごとに元気な牛馬の提供を受けながら旅をした為かも知れない。又、当然のことながら、通った道の状況によって速度の変化が見られた。即ち、長松嶺の西からオールドに向かう経路のように、勾配、屈曲の多い山道では 25km/d と速度が下がり、ヘルレン河行程のように、水草が多く真っ直ぐな道が多ければ 28km/d の速度で進んでいた。33km/d が、カラ・トンからトーラ川西への行程で出ているが、日数の間違いの可能性が高い。これらが判明したのは GMap の威力である。

③ 騎馬行と牛車行

この区間の牛車の速度は 28km/d を出している区間が多かったが、後の行程では少し落ちている。モンゴル本土という進みやすい土地と、恐らく替え牛が多かったのだろう。

騎馬行の初期は牛車行より遅かった。これは乗り手の技量の問題である。チンカイ城までの間に、七十歳半ばの真人を含めた一行全員が騎馬行に習熟したと思われ、2 章以下では騎馬行が増える。

筆者は乗馬経験があるが、手綱と鞭だけで馬は動くものではない。脚をしっかりと使わなければ馬に乗り手の意思は伝わらない。揺れる馬上で身体を保つには脚力と背筋力を鍛えると共にバランス感覚を養う必要がある。鞍について、西洋式鞍は革製で柔らかいが、それでも鐙の上に立つように乗ることが多い。モンゴルの木製鞍にも乗ったことがあるが、座り込むと尻が痛いので、なおさら立つように乗る必要がある。漢人一行のこの期間は、乗馬習熟段階だったのだろう。なお、鳥居龍蔵の蒙古旅行記によれば、牛車の速度は遅いが揺れが少なく快適で、ラクダ車は速度が速いが揺れに癖があり、快適で無かつたらしい。ラクダ車は当時も使われており、ゴビ地帯では有効だったはずだが、ラクダが引っ張る車に乗ったとの話も、直接乗ったとの話も本旅行記には全く出てこない。

④ ヘルレン河変曲点

良く知られているコデエ・アラルの 30km 東、46.93N109.40E 地点に 230m 四方の町らしき跡があるので、到着点はここであろう。今後の研究が待たれる。

⑤ 今後の課題

地理学、考古学的には、

- ① ヘルレン河変曲点の駅亭位置の確認とその実態。
- ② カラ・トンからトーラ河渡河経路。
- ③ 長松嶺の後ろから西の経路。
- ④ トンソンツェンゲルからウリヤスタイに至る道。
- ⑤ ウリヤスタイ故城の実態

などがある。

天文学からは、

- ⑥ チョイバルサン付近で見た日食の見え方。
- ⑦ 当時の暦による夏至日が計算と合わない点。

以上を調査すれば、より信頼性のあるものとなるだろう。

第2章 チンカイ城からサマルカンド

2. 1 チンカイ城出発→大溪谷越え

- A. 八日（八月）、門人虚静先生趙九古ら十人、二台の車、蒙古駅騎二十余を従え、大山のかたわらを西に進む。劉仲録と鎮海丞相が百騎を率いた。
- B. 西南行すること約三日にしてまた東南の方、大山のかたわらを過ぎ大溪谷を越えた。
- C. 中秋の日、金山の東北に至り、少し留まってからまた南に向かった。
- D. その山は広大で深谷長坂あり車の通行は不可であったが、第三太子のオゴタイが兵を出して初めてその道を開鑿した。一行は伴ってきた百騎の兵に命じて車轅をかけて引かせて車を上げ、また下りには輪を縛って降りなければならなかった。
- E. かくて四行程に五度、山嶺を越え、南行して山前に出て川の岸に宿った。同行のものは天幕を連ね宿営を張った。そこは水と草の便が良かったので、駅伝の牛馬を待ってから、数日進んだ。川を渡って南に進み、前の小山を過ぎたが、そこには五色の石があった。またその付近には草木は七十里の広きに渡って生じていない。また二座の赤い山が道に当たってそびえていた。さらに三十里の間は塩が地に吹いている土地で、そのなかに一か所の小さい砂中の井戸があった。そこに止まって水を汲んで食事を整えた。付近には青草があり、羊や馬が放牧されていた。

大山のかたわらを西に進む

シャルガ地域は高山に囲まれた盆地である。西に向かう道が今もあり、それを進む。やがて現在のトンヒル村の南からアルタイ山脈に入る。しばらくすると、標高が 2,400m ほどの所に道が北と西に分岐する地点、46.27N93.63E がある。ここまで 140km の距離を進んでいる。車があるということは牛がいることなの、騎馬隊が多くても牛車の速度でしか進めない。28km/d で進んだとして 5 日かかっただろう。北に向かうとアルタイ山脈の中に入り込んでしまうので、ここで西に方向を変えたはずだ。

金山の東北の地点

道なりに進み、2,800m の高所をこえると曲がりくねりながら南に下る山道があり、途中から川が流れている。これが大溪谷であろう。下り終えた平地には溪谷からの川が流れており宿営地にふさわしい。標高 2,000m の 45.93N93.22E 地点である。分岐点からの距離 65km を 3 日だから速度は 22km/d となる。曲がりくねった山道だから少し遅い。到着日の中秋は 8/15 なので、チンカイ城出発から 8 日目となり、A.行程の推定 5 日と B.の 3 日の計に一致する。宿営地は、地図上ではモンゴルアルタイ山脈の西側である。だが、西北に伸びる主脈の東北面がよく見えるので、東北の地点に達したと書いたのだろう。

その山と川

C.に南に進んだとある後から D.の文が続くので、8/16 以降のことしたくなるが、そこにはこのような山道がない。内容からしても、D.と E.は、B.でいう大溪谷を越えた時のことを述べている。四程に五度山嶺を越えたというのは、A.の行程の最後の 1 日に嶺を 2 つほど越えているので、B.の 3 日に加えた 4 日で 5 度嶺を越えたとの意味である。要するに、B.と C.

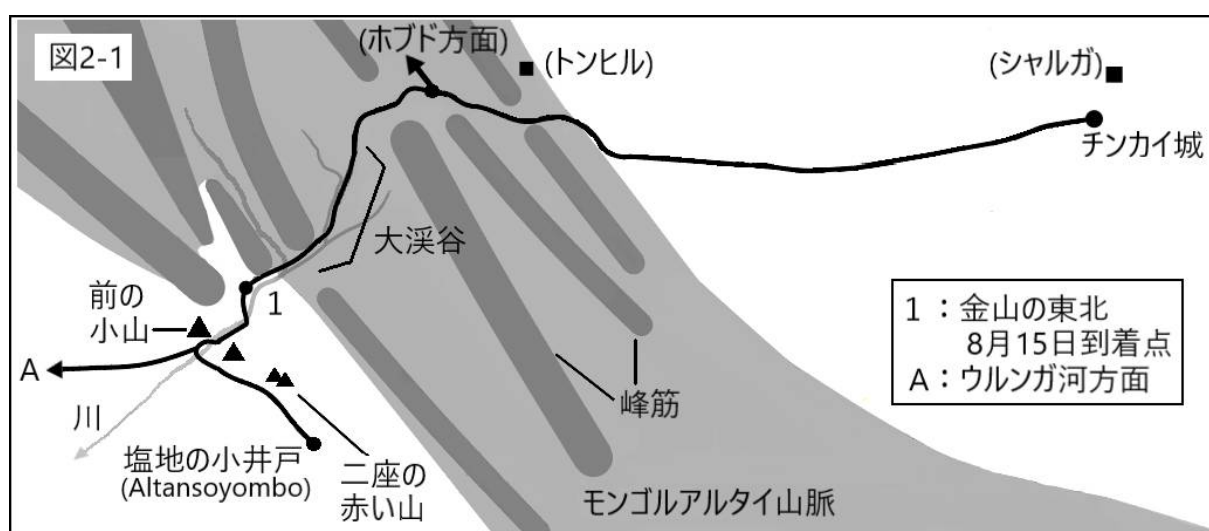
までの行程に A.の最後の日を加えた行程を振り返って、大変な道であった、と述べている。当然、E.の川は峠の下り道の途中から流れている川である。次の F.で出て来る川も同じものである。ここで作った詩に大河と書かれているのは、他に川がないのでその辺りでは大河と言えると、誇張して面白がっているのだろう。

金山の東北を出発した日

少し留まったとあるのが駅伝の牛馬を待っていた時間であろう。せいぜい 1 日とすると、16 日が休憩で出発は 8/17 となる。岩村本は数日待ったと訳しているが、後で述べるように、数日も待っているようでは日数が不足して和州にたどり着けない。

前の小山、赤い山、砂中の井戸

E.に、数日進んだ後に再び渡河とあり、地理状況が詳しくなる。だが、数日間の記録がない後に突然詳しくなるのはおかしい。ここも、数日進んだ内容を以下の文章で述べていると考えるべきである。河とは出発地に流れていたものである。そこから現在の経路表示に従って南に進むと直ぐに岩山を越える。これが五色の石があった前の小山であろう。山の間を河沿いに進むと別れ道、45.84N93.07E がある。西へ進むとアルタイ山脈の西北に向かいウレンガ河方向に向かうので、ここで道を南東に取ったであろう。経路表示に従い 10km ほど行くと、北側の 45.81N93.19E 地点に赤っぽい山が二つある。これが二座の赤い山であろう。更に進むと道がいくつか集中している所に小さな集落がある。アルタンソヨンボ (Altansoyombo) という名である。白い地面が見えるので、塩地の小井戸の地点と推定する。標高 1,700m 強である。赤い山から 17km なので、30 里という距離に一致する。出発した金山の東北地点からは 45km なので 79 里ほどになるが、岩山の入り口までの数 km ほどは草があったと考えれば、首尾 70 里に渡って草木が生えていないというのに合致する。ここまでは牛車行のようなので、2 日弱の行程であろう。到着は 8/18 の昼過ぎとなる。



2. 2 塩地の小井戸から和州まで

G. 劉仲録は鎮海に、「この先は最も難しい場所だがどうするか」と相談した。鎮海は、「この地は以前から知っている」と言った。二人で真人のもとに行って説明した。鎮海い

わく、「この先に行けば白骨甸で、地面は黒石である。二百里余里行けば砂漠の北辺に達していますが水と草が豊富です。さらに大砂漠を渉ること百余里ですが、砂漠の東西の長さは幾千里あるかわかりません。ウイグル人の城市に着けば水と草を得ることができます」。真人は、「なぜ白骨甸というのか」と尋ねた。鎮海は答えて、「昔から戦場から疲れた兵がここに逃げてくれば、十に一人も還ることができない死地だからです。先年もナイマンの軍兵が多くここで死にました。晴天の日の昼間に旅すると、人馬とも往々にして困憊します。夕方に旅を始め夜間に進み半ばを行います。翌日昼頃水と草を得ます。少し休んで、午後遅くになって再び旅を進め、砂丘を百ほども過ぎます。舟で大波の間を行くようです。又翌日の朝方にウイグルの城に着きます」

H. 日が暮れると共に出発した。牛が疲れたので捨て去り、六頭の馬をもって代え、以後は牛を使用しなかった。初めて砂漠の北辺に達したとき、南の方を眺めると天際に銀霞のごときものが遠望された。これを訊ねたところ、左右の者一人として知る者がなかった。師は「おそらくは陰山（天山の意）であろうと」と言った。翌日樵に会って聞くと果してそうであった。

I. 八月二十七日、天山の後ろに達した。ウイグル人が迎えに出て、小さな城の北に至った。酋長は酒、果物などを捧げて、「ここは天山の前三百里の地にある和州（火州とも。ウイグル語でカラ・ホージョ）であります」と言った。暑熱はなはだしく、葡萄をおびたしく産する。

J. 翌日川に沿って西行し二小城を経た。その西にはベシュバリック大城があり、そこに至

ると王を始め、官員、士、庶民など数百人が異議を正して遠く郊外に出迎えた。……。付近には唐代の辺城の跡が今もなお処々に残っている。この大城の東数百里のところに西涼府という一府城があり、その西三百里のところには輪台という県がある。師は皇帝への行在はさらにどのくらいかかるかと尋ねられたところ、一同はここから西南にさらに一万余里であると答えた。

経路概観

明確なのは到着点の和州で、現在の吐魯番市の南東 30km にある高昌故城、42.85N89.53E である。火焰山の南にあり、火州とも書かれた。塩地の小井戸から直線距離で 440km ある。8/19 出発とすれば 8/27 着の 9 日間である。行程速度が 50km/d を越え、ほとんど騎馬行をしたであろう。蓋里泊からの半年の旅で、漢人全員が騎馬に慣れたと思われる。車二台を伴っていると書いているが、牛を捨てているので初日だけ牽いたのだろう。

天山

天山の後ろ（北）に達した後に直ぐ小城の北に達し、到着点の和州は天山の前（南）300 里である。天山の前（南）と言っているのも、和州の位置からしてこの天山は、現ウルムチの東からハミの東まで続く天山山脈の東の支脈のことである。距離は和州の北 60km（100 里）少々である。天山山脈の後ろ（北）に着いたはずがなく、小城の手前にある火炎山の北に着いたのをそう言っているのだろう。なお、いわゆる天山山脈には南と北の主脈があり、ウルムチの西から西北西に延びている嶺が北脈で、その南北を有名な街道、天山南北路が通っていた。タクラマカン砂漠の北を東西に走っているのが天山山脈の南脈である。

白骨甸

大地が黒い石で覆われて 200 里続く白骨甸地帯とは、次図に示すように、モンゴル・中国国境に広がっている大きい黒点で示した一帯であろう。黒い大地に、高所から時おり流れ出す川の流れに含まれる砂が作ったものであろうか、白い筋が無数に刻まれている。衛星画像で見てもすごい光景である。村はモンゴル側に一つ、中国側に一つだけ見える。白骨甸に入る手前には北にも南にも岩石地帯が壁となって続き通行できそうにないが、激しく蛇行しながらその地帯を貫く河跡と思しき道が何箇所かある。ただし、通行に使われていそうな所は多くない。モンゴル側と中国側の経路標示の延長線が接するのは 45.00N93.22E 地点であるので、ここが白骨甸入口だろう。関口の図でトビンとある地点であろうか。モンゴル側は標高 1800m 以上の台地であり、白骨甸の中心部は標高 500m 以下になる盆地である。南に進むと又高度が上がり 1800m の峠道を越えて達するバルクル・カザフ自治県が標高 1500m である。

水と草が多い地点

白骨甸の北から見て、チンカイの言う二百余里、即ち 130km ほどの南で、水と草が多い所は現在のバルクル・カザック自治県であろう。白骨甸を進んで翌日の昼頃到着して水と草を得る、という地点は三塘湖であろう。大砂漠を渡った後に、ウイグル人の城市に着けば水と草を得ることができる、とあるのは、和州の東 100km から始まる農地の辺りであろう。

塩地の小井戸から白骨甸取り付きを経て三塘湖への経路

塩地の小井戸には 8/18 の昼過ぎには着いていたはずだ。午後に休憩し、白骨甸夜行のために身体を慣らさなければならぬので、その日の夜になって出発したのだろう。小井戸から白骨甸取りつきまでには経路標示がある。まず南に下って、45.55N93.19E で南東に向きを変え、45.26N93.66E 地点を経る。ここは道が集まっていて小さな川、ガシューン(Gashuun)水がある。小井戸から 70km である。ここは関口の図でドボインオボニとある地点であろうか。ここから西南に道をとる。45.01N93.22E にも道が集まり建物があるので、水場らしく思える。Gashuun 水から 43km である。そこから白骨甸入り口まで南西に 12km である。白骨甸に出るには高低差 400m の岩石地帯を下らなければならない。直線距離は 8km ほどだが、蛇行がひどくて実距離は倍ほどある。道は狭いが、川がえぐった浅い谷底のような地形が続くので、夜行でも道に迷うことなく進めるだろう。44.94N93.24E で白骨甸にでてからはまっすぐに三塘湖、44.24N93.34E に向かったはずだ。経路標示に従って距離を求めると、小井戸から白骨甸取りつきまで約 130km の距離がある。最初は牛を連れているようなので、8/19 の朝までの進行距離は 25km くらいだろう。翌日牛を捨てて騎馬で進み、ガシューン水を経て、8/20 朝に白骨甸入り口の 12km 手前の水場に到着とすると 90km 弱の移動になる。8/20 の夜に出発して、岩石地帯を越えて三塘湖までの 110km は一気に進み、三塘湖着は 21 日の午前中となろう。そこには現在小さなダムと農地がある。岩石地帯を越えたところからは 80km になる。休憩場所の無い厳しい行程である。疲れたナイマン兵が多く死んだのも納得できる。

三塘湖からウイグル人の城市

三塘湖は標高 1000m で、ここから南へは 800m ほどの登り道になる。高原を進み、翌日

の明け方頃、ウイグル人の城の 20km ほど手前で視界が広がると、雪を頂く天山山脈の東の支脈が見えるだろう。真人が陰山と言ったものである。ウイグル人の城とはバルクル・カザフ自治県で、鎮海の言葉の通りとすれば、22 日の朝頃着であろう。三塘湖から 85km 弱ある。3 日連続のきつい行程であった。

大砂漠を経て和州

東西の長さは幾千里あるかわからない、とある G.の大砂漠は、東のアラシャン砂漠から西のタクラマカン砂漠までのことを言っているのだろう。ざっと 2,500km の距離がある。大砂漠には東西に走るいくつもの通行痕があり、カレーズと思われる地面の掘り起こし跡の数もおびただしい。経路の想定が難しいが、バルクル・カザフ自治県から現在の省道 303 に従って西に進み、43.72N91.52E から省道 238 に移って南下する。七角井鎮を過ぎた 43.72N91.59E 付近で省道は終わるが更に南下すると、43.21N91.73E で東西に走る大道の通行痕に出る。ここを西に進み、43.14N91.41E、43.17N91.15E を経る通行痕に従って西に進んだのではなかろうか。この道は標高約 800m の高度に沿って延びており、くねり方が古道に見える。大砂漠にでるまでも百里の砂漠を渡るとあるのは、大砂漠を東西に走る幹線路にたどり着くまでも百里の砂漠があるとの意味に解しよう。これは七角井の 10km ほど北にある岩石地帯を抜けて来た所から、東西に走る幹線路との接続点までのことでは無からうか。50km 強の距離だから約百里である。8/27 に和州着であるから、バルクル・カザフ自治県から 5 日掛かっている。約 430km の距離を 86km/d の速度になる。和州の標高は 200m を切るの、下り坂が多く速度が速くなっているのだろう。なお、トルファン南方のアイティン湖の湖面標高は海面以下である。

二小城とベシュバリック大城

8/28 日に和州を出発。城の北西 7km 程の所に東西に流れる川があるので、これに沿って西に進んだのだろう。この後、ベシュバリック城を出て西に進んだのが 9 月 2 日となっているので、城への到着はその前日の 9 月 1 日だろう。和州から 4 日間の移動となるが、到着した日に城主の大歓迎を受けているのでかなり早く到着している。実質 3.2 日位と見る。80km/d の移動速度とすれば、和州から 260km の距離内にベシュバリクがなければならない。その間にあって大きな町と言えばウルムチだけである。和州から市内まで 230km ほどであり、距離は予測の範囲内である。行程を考えると、この間にあった二城は、交河故城と達坂故城であろうが、過ぎた、とあるのでどちらにも立ち寄らなかったようだ。移動初日となる 8/28 の宿泊地を決めるのは難しい。次の達坂城鎮は標高 1,000m で、その手前の峠が 1,200m で、峠の登り口が 600m 程である。高度を上げなければならず道もくねっており、早く進めそうに無い。初日にできるだけ峠の登り口近くまで進んでおいた方が良いはずだ。それらしい集落は想定進路に無いが、大草湖という地名がある。ここを通過している通行痕が激しいので、ここに宿したと考えたい。和州から 75km 進むことになる。8/29 は坂を登って達坂故城を過ぎ、現在の町の西郊辺りに宿したのでは無からうか。60km の距離である。ウルムチは標高 800m 台なので、翌 8/30 は 80km 進み、現ウルムチ市街の南端に宿す。そこから 10km ほど進めば 9/1 の午前中早くにウルムチ市の中心部に到着する。即ち、ベシュバリク大城入城である。ここまで非常に厳しい行程だったので、大歓迎会が待っていた。

現在の説との矛盾

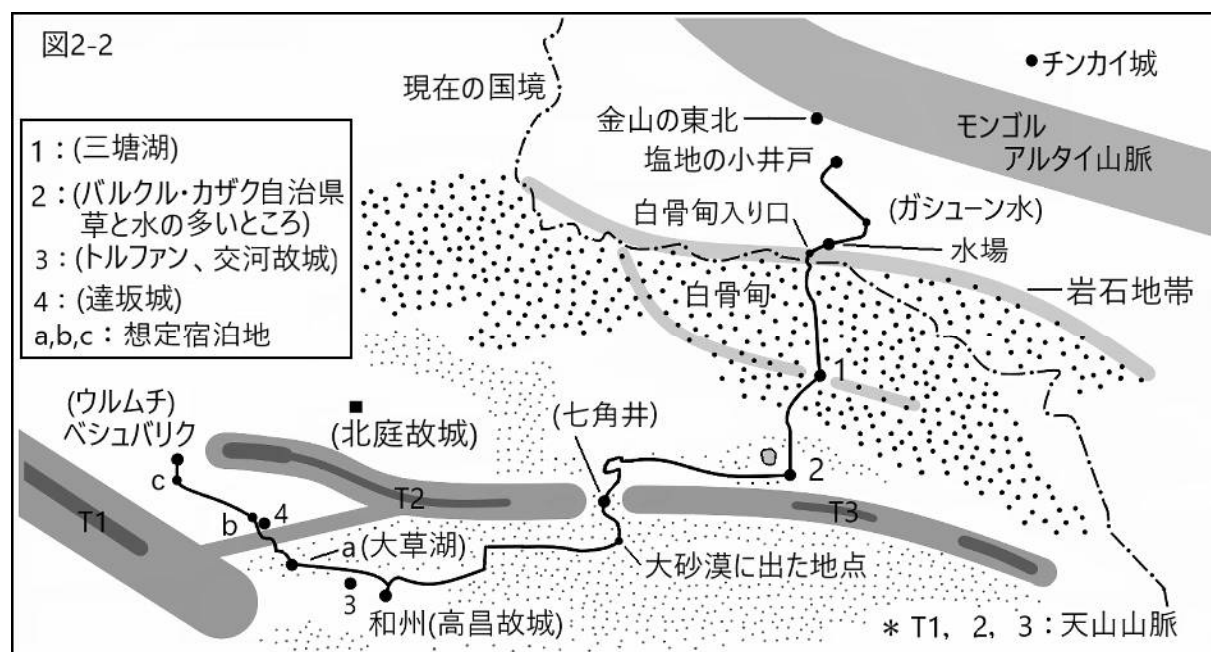
以上のようにベシュバリク大城の位置はウルムチとなったが、これは定説と異なる。日本と中国では昌吉回族自治州吉木薩尔（ジムサル）県城の北 12km にある北庭故城の地 44.09N89.21E とされている。和州から北に進んで山を越えるとか、ウルムチ回りで北庭故城まで行くとか考えられないので、西遊記に従えば、和州から騎馬で西に 4 日行程以内の所にベシュバリクがなければならない。それはウルムチである。

西涼府と輪台

ベシュバリクの東数百里の所に西涼府があるというが、和州ではない。ベシュバリクから北庭故城を経る草原の道にあったと思われる。北庭故城では近すぎるので、木壘カザフ自治県の所であろう。歴史的には古いようであるので候補地になる。これより東に、歴史の古そうな町はない。西三百里に輪台がある。これはウルムチから天山北路の西方向だろう。180km の沙湾県が該当するが、この町の歴史は清朝頃からのようなので候補になりえない。現在も輪台県はあるが、ウルムチの南 440km の所で、方向も距離も違う。

行在まで

一万余里とあるが、チンギス・カンが攻めた一番南はインダス河である。そこまでざっとした距離が 3,000km、実質 4000km にはなるだろうから 7000 里ほどになる。万里はおかしい数字ではない。



2. 3 ベシュバリク城からジャンバリク城を経て天池

- K. 九月二日西行する。四日、輪台の東に宿した。南の方、陰山を望むと三個の峰が突兀として天にそびえるのが見えた。
- L. また次に二城を経て、九日を費やしウイグルのジャンバリク城に着いた。その王は鎮海の旧友であったので、部族を率いウイグル僧を伴って遠く郊外に出迎えた。

- M. 翌日天山に沿いに西に進むことおよそ十行程。また砂漠を越えた。その砂漠の砂は細かくて風にあれば流れて波のように集まっては散る。一寸の草もない。車は砂に埋まり、馬は遅々として進まない。一昼夜にしてようやくこの砂漠を脱した。これはけだし白骨甸大砂漠の分流だろう。
- N. 南は天山の麓で、砂漠を渡って五日を費やし、天山の北に宿した。
- O. 翌朝南に行き、七、八十里の長坂を経て暮れに至って宿した。寒く、水のない土地であった。
- P. 翌日早く起きて西南行すること約 30 里にしてたちまち大池が現れた。その周囲はおよそ二百里で形は丸く、それを取り巻いている雪嶺の姿がさかさまに池中に映じている。真人は天池と命名した。
- Q. 池に沿うて真南に下って行つたが、左右の峰つづきの山々は峭拔として高く、松と樺は陰森と茂り……、幾多の水流は峡谷を奔騰し、洶涌として幾度かめぐり、六、七十里を流れている。第二太子ジャガタイが……初めて石を鑿ち道を修理し、木を切って 48 橋を架けた。…。夕刻谷間に宿した。

輪台

漢時代の輪台は天山南路にあり、唐代は現ウルムチの事だったという。当時もウルムチを輪台と言っていたのなら、先に述べた説も覆り、東の北庭故城からやってきたことになる。しかし東からウルムチに来る道は、ウルムチの東ではなく北に繋がっており矛盾する。車を使用している記述があるので、ベシュバリクからはまた牛車行に戻ったようである。9/2 出発で 4 日要しているから西に 120km ほど進み、輪台の東に 9/5 着である。輪台には翌 9/6 着となるので、移動距離は 135km 前後である。現在の石河子市付近になる。

ジャンバリク城

K. の 4 日に L. の 9 日を加えて、ベシュバリク即ちウルムチから 13 日で到着とすると、牛車で 360km ほど移動したことになる。国道沿いに西にそれだけ進んだ N44.3E83.3 付近は砂漠地帯であり、ジャンバリクにふさわしいような町はない。ジャンバリクは、中国のサイトでは現在の石河子市の直ぐ東にある瑪納斯（マナス）県だとしている。ウルムチから 130km ほどの距離であり、牛車 5 日ほどで達するはずである。不思議なことに、先に推測したベシュバリク城から輪台までの距離と同じである。ここで気になるのは L. の二城を経たという言葉である。J. でも和州からベシュバリクへ至る道に二城の言葉があった。もしかしたら、経過日数の 9 日は和州からジャンバリクまでの総日数を述べたものかも知れない。今までにも何度かあったように、前文の内容を詳しく繰り返した可能性である。であれば、8/28 に和州出発だから 9 日目の 9/6 にジャンバリク城到着となる。驚いた事に、ベシュバリクから輪台への到着日と、和州からベシュバリクを経てジャンバリク城への到着日は同じになった。ということは、輪台とジャンバリク城は同じ地の異なった呼び方で、現在の瑪納斯県ということになる。輪台の東で見えている三個のつながった峰は天山山脈であろう。マナス県の東でどのように見えるのであろうか。ベシュバリクから輪台までを三百里としているが、恐らく二百里の間違いであらう。この辺りの標高は 600m 弱であり、ベシュバリクより少し低い。

輪台とベシュバリク

輪台はジャンバリク城の別称であった。また、かつてウルムチも輪台と呼ばれていた。更に、ベシュバリクはトルコ語で 5 つの城の意味であった。これら二つの言葉はもともと地点名ではなくて、地域名であったのだろう。現在のウルムチ地域にあって、輪のように強固につながって地域防御を行う拠点の集合を輪台と唐時代に呼んでいた。後にトルコ族がこの地で優勢になると、主な城が 5 つあったので、自分たち流に 5 つの城、即ちベシュバリク地方と呼ぶようになった。即ち、北庭故城、ウルムチ城、ジャンバリク城、これら全てが輪台であり、かつベシュバリクであったと考えられる。その中でも中心となる城に対し、次第にベシュバリクの名が固定されてゆき、古い呼称の輪台は周辺の小さな城を、漢人のみが呼ぶようになったと考えたい。これらの城市群の中でも、地理的にも重要なウルムチが主城としての役割が大きかったのでベシュバリクと呼ばれたのだろう。現在の北庭故城は暑を避けた夏の城としての性格が強かったのではなかろうか。ベシュバリクの位置に関し説が種々あったのは、このような背景からであろう。真人一行が、ジャンバリク城に対しわざわざ輪台の言葉を使ったのも、輪台地域はここで終わる、という漢人らしい認識であり、ジャンバリク城までの総日数を和州から計算したのも、和州が輪台地域の始まりと考えていたからだろう。

以上の考えだが、1955 年発行の「西ウイグル国史の研究」の中で、安部健夫がベシュバリクの位置について種々の説をまとめている中に既にある。ただし、安部はウルムチがベシュバリクであるという説は否定している。この説の可否は著者には論じられない。

白骨甸のような砂漠

白骨甸のような砂漠は、托托鎮（昔の地図ではトトコータイ）の西に広がる 44.65N83.34E 辺りであろう。東西に 50km ほど広がっている。渡りきって到着した所は精河县と想像する。前日の托托鎮からの距離は 60km ある。一昼夜だから時間は 3 日分あるので、普通なら牛車で 80km ほど移動できるが、砂に足を取られてこの速度になったのだろう。ジャンバリク城から托托鎮に達したのが十日で、出発日の 9/7 から 10 日後の 9/16 到着である。この間の距離は 230km なので速度が 23km となる。河をいくつか渡っているの、遅くなっているのだろう。砂漠を渡り始めた日が 9/17 で、精河县に着いたのが翌 9/18 となろう。

天山の北

前泊地から、西北に進むと博尔塔拉（ボルタラ）蒙古自治州、44.91N82.07E がある。着いてから南に向かっている地理的な特徴からも、ここが天山の北であろう。精河县から 100km の距離があり、5 日かかっているから、速度 20km/d となる。砂漠で無理をしたので到着翌日を全休したとすれば 25km/d となって妥当である。到着日は 9/22 となる。

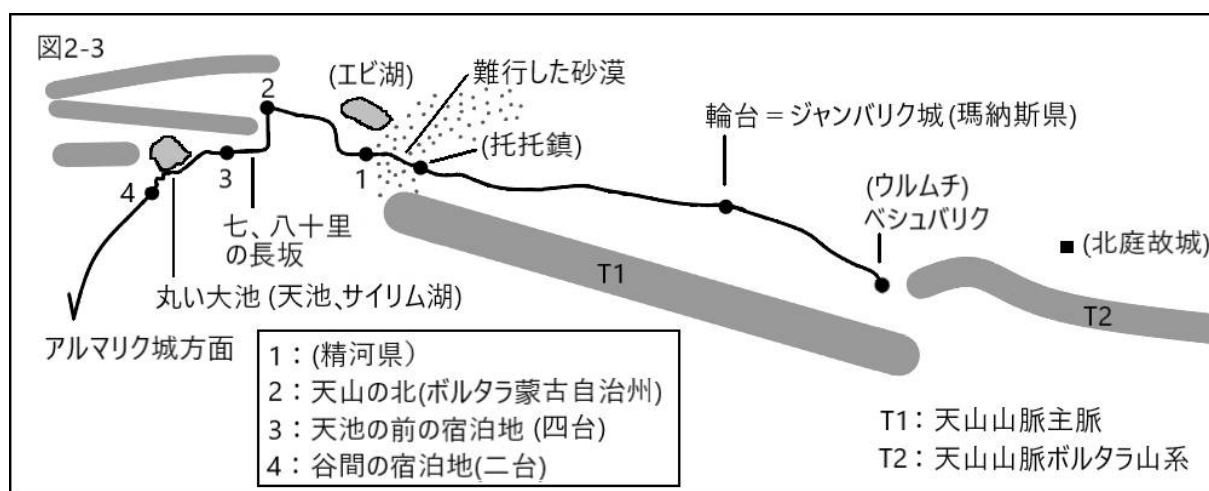
丸い大池

これは現在の賽里木（サイリム）湖である。湖周囲 90km は、ほとんど 200 里の記述に合う。流出する河川がないので天池と表現したのだろう。ここに来るのに 7、80 里の坂道を越えたところから、距離からして騎馬での移動に戻っている。天山の北を南に出て途中で西へ、天池方向に向かうはずだ。サイリム湖面の標高 2,072m は、出発点の博尔塔拉蒙古自治州の標高約 500m より 1,500m も高いので、西に向かう真っ直ぐな道は坂になっている。池の手前の宿泊地は、四台と表記のある 44.61N81.68E 地点であろう。この辺りで標高 1350m ある。出発からの距離は 60km 程になる。天地の東には小さな岩山があつて湖を隠しているが、これを越えると急に湖の光景が広がるはずである。想定した前泊地から 17km ほどになるの

で、30里でたちまち池が現れたとの表現に合致する。

松と樺が陰森と茂る山並みを越える

サイリム湖の南端から始まる山道は、最初少し標高が上がり、しばらくは小さな谷が複雑に入り組んでいて、速度は出ないだろう。国道312号は新しく見えるので、その西にある経路表示に従って進んだのではなかろうか。夕刻に谷間に着いて宿したのは、二台と表示されている地点であろう。この辺り、三台、四台と台の付く地名が昔の地図に見られる。今は人家がほとんど無いが、宿駅の名残と思われる。二台は前泊地から65kmになる。山道を登りきってから宿泊しようと思ったので、時間が掛かり、夕刻に着いたのだらう。ここから山道は下りになり、平地になるまで35kmほどあるから、六、七十里続く、の表現の通りである。



2. 4 天池からアルマリク城を経て山北の小城

- S. 翌日出発し東西に流れている大川に至った。付近は水が豊かで天候は春の如く、桑や棗の木がちらほらしていた。次に一行程で、9/27、アルマリク城に着いた。
- T. また西行すること四日にしてタラス川に至った。その川は西北に向かって東北から流れ来り、天山を横切っている。川の南にはまた雪山があった。
- U. 10/2 船に乗ってタラス川を渡り、南下して一大山に至った。山北に一小城があった。

東西に流れる大川

大川はイリ河以外にない。東西に流れるのを実見して宿泊したはずであるから、その地点は43.91N80.98E 辺りではなかろうか。前泊地点より80kmほどの距離である。伊寧市付近は標高800m以下の平地であるので、山の上から1200m以上下って来ている。

アルマリク城の位置

アルマリク城は通説では現在の伊寧市である。だが中国語サイトでは、伊寧市西の霍城县付近としている。伊犁將軍府の表示がある所だとすれば、清朝からのものであり時代が新しすぎる。ここでは従来通りアルマリク城を伊寧市と考えたい。翌日1日行程進んでアルマリク城着、とあるから、30kmほど離れた伊寧市に到着したとするのが妥当である。

移動状況

進行速度から見て、天山の北からは騎馬である。しかし、この光景を詠った真人の詩には、「双車上下して頓（漢文原文は敦）テン（手扁に真頁）に苦しみ、百騎前後して驚惶多し」や「車を懸け馬を束ね西の方山を下る」と車の様子が書かれている。しかし車を引っ張ると、50km/d の速度は出せないはずで、どういう状況を言っているのか不明。

ジャンバリク城からアルマリク城までの日数の確認

9/27 にアルマリク城到着と、しばらくぶりに日付記録がある。天山の北から 4 日掛かっているから、天山の北出発は 9/24 である。前節で到着日を 9/23 としていたので一致する

タラス川

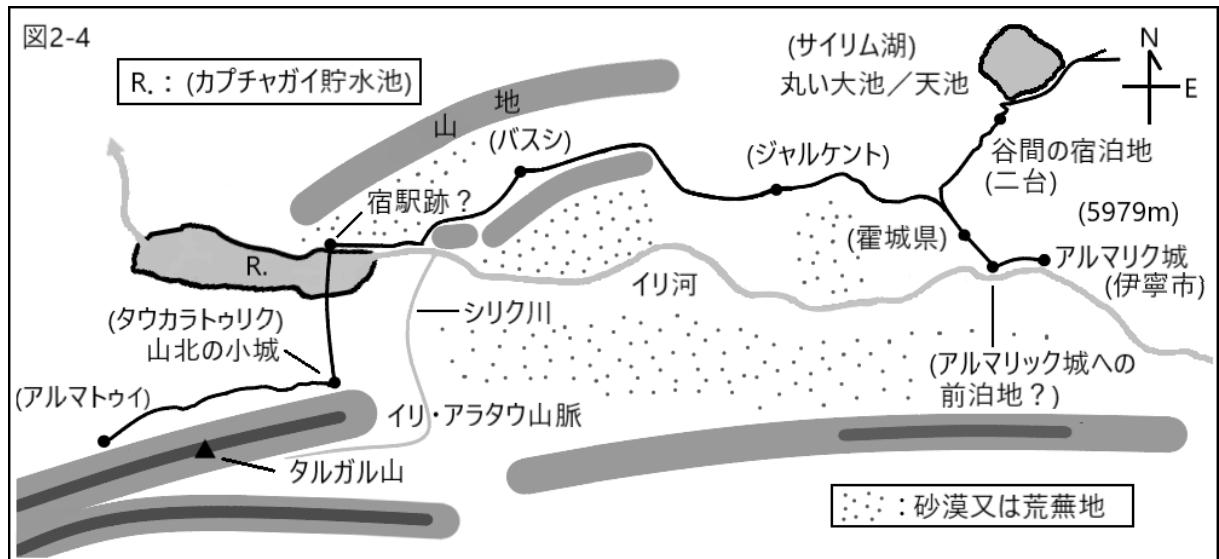
岩村本の注にあるように、現在のイリ川である。キルギス国の西北部にあるタラス川とは区別する必要がある。安部の書にも一節設けていくつかのタラス川について考察している。

アルマリク城からタラス川を渡った地点

9/28 に城を出てから現在のカザフスタンに入り、ジャルケントを通りバスシに至る。以前はそこから北に山越えする経路を考えていたが、イリ河までの距離が遠すぎる。バスシから南下してイリ河に出たと考える。そこは現在のカプチャガイ貯水池（1969 年からの人造湖、湖面標高約 480m）の東北端付近になる。43.87N77.97E に、120m 四方の城遺跡のようなものが見え、天山回廊の中の宿駅だったように思える。兩岸には川に伸びる通行痕が何カ所もある。これより東は南から流れ込むシリク川付近の流路が複雑で渡りにくい。更に上流に渡河地点はあるが、アルマリク城からの行程もその後の行程も、どの移動手段でどのように進んだのかうまく解釈できない。山北の小城の候補地点も見当たらない。アルマリク城から河の北岸まで 320km あり、4 日で来ているので速度は 80km/d で、10/1 着である。

大山と山北の小城

翌 10/2 にイリ川を渡る。後の考察から、これほどの河の渡河には半日程度要する。前進できるのは半日で、騎馬だから 40km ほどである。北に山を負う場所を探すと、宿駅跡から真南に下ったタウカラトゥリク、43.49N78.02E が候補になる。ここに城があったのだろう。42km の距離である。現在の街道からは外れているが、ここから東西に延びる道がある。現代の街道は平野部にあるが、人や農地の多い所に行くより、当時は山際の道の方が騎馬でも牛車でも進みやすかったのではなかろうか。ここから又牛車行になる。



2. 5 大石林牙へ

- V. また西行五日、劉仲録は一足先に出発した。
- W. 西に進む事七日にして西南の一山を越えた。東夏の使節に会した。
- X. 翌日大雪に遇う。ウイグル人の小城に至るころ雪は一尺に達したが日が出ると共に消えた。
- Y. 十六日、西南に板橋を渡って川を越し。晩に南山の麓に至った。ここは即ち大石林牙である。

大石林牙

到着点の大石林牙は西遼の首都であった。遼朝の一族であった耶律大石が樹立した国であった。現地では国のことはカラ・キタイと呼ばれた。首都はクズオルドと呼ばれ、その前のカラハン朝時代はバラサグンの名であった。漢人は漢文明から遠く離れた地域にできた王朝を遼とは呼べないとして、国のことも首都のことも大石又は大石林牙と呼んでいた。林牙は大石の宮廷での地位であった。現キルギス国のトクマクの東にあるブラナ村の塔はその遺構で、町の西郊と言われているが、具体的な場所は現在不明となっている。

行程外観

西行5日で到着したのは現アルマトゥイであろう。当時の中心地は南部の山に近い方であったと想像するので初代大統領記念公園あたりとしておく。そこで劉仲録が一足先に出発したということは、真人一行は午前中に到着して留まったが、劉仲録はそのまま進んだのだろう。とすると、西行5日は実質4.5日くらいだろう。ここから大石林牙との間にはイリ・アラタウ山脈の西脈が伸びている。西南に向かう道がウジナガシュという町から始まり、山中のカステク村、43.08N75.99E、標高1200mに向かい、さらに道路標示が南へ延び、最高点はカザフスタンとキルギス国境にある2,400m程の峠である。山道の10km毎くらいに、小さな建物や空き地が今も見えるのは、宿駅や休憩場所だった名残だろう。激しい通行痕が見える部分も多い。下りきった所で東夏の使節に出会った。彼らはこれから山越しようとしていたのだろう。その場所は山を下りて直ぐのカラ・トゥムシュク、42.82N75.77E 地点と想定する。ここも宿駅跡のように見える。標高1,200mほどである。その後に渡ろうとした橋

は先の地点の南東 7km に今もある橋だろう。向きも西南に向いているので、昔と同位置であろうか。翌日橋を渡って大石林牙へと進む。

移動速度と到着点

一行がタウカラトゥリクを出発したのは 10/3 である。アルマトゥイまでは平地の 115km である。4.5 日で 26km/d の速度になり、牛車行に戻っている。10/7 着。翌 10/8 に出発して西南に一山を越えるまでに 7 日要した。アルマトゥイからウジナガシュまでの 50km は平地なので 2 日、そこからカステク村を経て山越えし、カラ・トゥムシュクに至る 80km ほどを 5 日となるが、この行程は 16km/d の速度である。牛車行としても遅いのは、高低差 1,000m 以上の峠と、北緯 43° という土地の冬の山道だから昼間の時間が短い為であろう。山を越えた地点カラ・トゥムシュク着は 10/14 となる。その日はここで留まって東夏の使節と挨拶を交わしたのだろう。翌 10/15 前進したが雪で足止めを食い、ウイグルの小城に滞留した。橋の西北 1km 弱の、チュイスコエという場所に専門学校があるので、小城はここだったとしたい。橋を守る役目があったのだろう。翌 16 日に橋を渡り、夜になってから南山の麓の大石林牙に着いているので、平地の 1.3 日前後、即ち 35km ほどを進んだはずである。翌日の 10/17 は 1 日中滞在である。

大石林牙の位置

橋を渡ってからブルナ方向に向かう道の 25km ほど南には、高度 4,000m 級の山脈が東西に走っていて、山裾が標高差数百メートルほどの山塊となって道の南に伸びてきている。途中の集落にとってはどの山も南山である。考えるポイントは、耶律大石軍は外来の侵入者であったことである。現地では少数派だったので、防御に強い土地を選んだと思われる。そのような観点で南山を探すと、オン・ビル・ジュルガの集落、42.70N75.47E の北の山に目にとまった。東西の小さい川で周囲の山塊より少し切り離されていて独立峰的である。麓から見るとなだらかな三角形をしているだろう。北面は平面的で、浸食地形と思われる 10 本近くの溝が南北に真っ直ぐ走っている。日本の城で言う畝状堅堀のようで、北からの攻撃はし難い。東西の川は比較的南北に真っ直ぐ流れていて、谷の奥まで見通しが効き人家も少ない。西の川幅は数メートルだが、川床の幅は 400m 近くある上に、周囲の農耕地より 20m ほど落ち込んでおり、城堀のようである。東方もチュイ河が狭い谷を流れていて守り易い。このように三方から敵に襲われにくい地形である。トクマクへの直行路もあるから、チュイ河添いの人口稠密地域へは出やすい。以上の地形的有利さを考えて、オン・ビル・ジルガ (On-bir-jilga) の集落が大石林牙であると考え。橋から 32km の距離になる。ただ、この辺りについての学問的な報告はない。



2. 6 サイラム城へ

- A. この地（大石林牙）でこれから先の道は難所が多いと聞いた。たまたま 1 台の車が壊れたので、これを放棄した。
- B. 十八日（十月）、山に沿って西に行き、七、八日にして、山がたちまち南に去ったところに一石城があった。その石の色はことごとく赤かった。そこには軍隊の駐屯した古跡があり、西には大なる冢が南斗星のように連なっていた。
- C. また石橋を渡り、西南に向かって山路を行くこと五日にしてサイラム城に着いた。そこには小塔があった。
- D. 十一月初め、毎日大雨が降った。四日、土地の者は新年として昼ごろ、賀を述べあっていた。虚静先生趙九古はその後数日にして病篤くついに逝去した。これは十一月五日であった。城外の東の原に葬った。

一石城

大石林牙からトクモクに向かい、それからビシュケク方向に向かったのだろう。南に東西に走る山脈があり、それに沿って西に進んで来るとタラズで一旦山並みが途切れるが、更に南に高山が見えるので、山が南に去ったと表現したのだろう。タラズ（Taraz）はカザフスタンの町で、町を流れるのはタラス河である。キルギス国にはタラス（Talas）の町がある。岩村本には、その土地の色が赤いと書かれているが、原文は、「一石城當途、石色盡赤」であり、城の石が赤いのである。インドの有名な赤い城のような感じであろうか。しかし、山波が切れるあたりの土地は実際に赤黒く見える。その石で城を作れば赤くなるだろう。42.86N71.42E 地点付近の地面に色々な痕跡が見えるが不明である。北西 500m ほどに大きな墓地のように見える一角がある。これが大きな塚であろう。南に現在もある橋の位置に石橋があったのであろう。

大石林牙からタラズまでの距離と速度

距離は 360km あり、7、8 日掛かっている。7 日なら 51km/d、8 日なら 45km/d である。

車を1台放棄したと書いているから、早々に牛車行を諦めたようである。少し遅いのは、農地が多いという地形や虚静先生の体調があらう。

タラズからサイラムまでの日程と速度

タラズから西南に進むが、東西に延びる山脈が道を遮り、あまり高くはないが山の嶺を三つほど越えなければならない。これが C.に言う山路で、A.で言っている難所なのだろう。5日でサイラムに着いている。到着日は10/29か10/30である。この町はシムケントの東14kmの所に今もある。現在の町の規模はシムケントより小さいが歴史の古さなら勝り、小塔が今も残る。町の標高は600mほどである。タラズからの距離は175kmである。5日かかっているが、例によって城主に歓待されているので、町にはかなり早く到着しただろう。4.5日としても、39km/dの速度になる。サイラムで虚静先生、趙九古が亡くなっていることを思うと、彼の調子が良くなく、負担がかからないように速度を落としていたのではなかろうか。11/5、病に伏せていた趙九古は亡くなり、郊外に埋葬された。

2. 7 サイラムからホージェント・ムレン

- E. ただちに南に進み、また三日にしてある城に着いた。
- F. 翌日また一城に着き、更に行くこと三日にして川に至ったが、それは、ホージェント・ムレンであった。浮き橋によってわたり、西岸に宿した。
- G. 河の西南にはまったく水と草のない地が二百里続いているので夜行した。
- H. また南に進み、西に大雪山を望んだ。山並みはサマルカンドの南の山峰と相連なっている。
- I. また一城に着いて水と草を得、さらに一城を経たが、ウイグルの長が遠く郊外に迎え、城南において食事を供し葡萄酒を献じ、且つ小児の軽業剣舞を演じせしめた。
- J. 更に二城を経て山道を行くこと半日にして、平地を南北に流れている河に至った。
- K. 仲冬十八日大河を過ぎサマルカンド大城の北に至った。サマルカンド守備を任された耶律阿海以下が歓迎のために郊外で待っていた。

ホージェント・ムレン

岩村本の原注にあるようにシル・ダリヤ（シル河）である。ただ、この名に定着したのは18世紀からとのことであり、国によって色々な呼ばれ方をしていた。現在ホジェンドの名で知られている町はタジキスタン国であり、歴史の古い町である。この町の側を河が流れているので、この名があったのだろう。サマルカンドに向かうための渡河地点は、現在のチナズ（Chinoz）であろう。河面標高350m位である。虚静先生埋葬の翌日、11/6にサイラムを出発し、最初の3日で城に着き、翌日また一城に着き、更に3日の計7日でシル河に着き、直ぐに舟橋で河を越えている。渡河日は11/12となる。距離は200kmで速度は29km/dと、牛車にしては少し早い。非常に人口稠密な地域で進みにくいように思えるが、むしろ街道が良く整備されていてこの速度になったと理解しておきたい。経路には町が多すぎて、立ち寄った地点を特定するのが難しい。

サマルカンドへ出発

シル河を越えた地点から西南 200 里の地は水と草がないとある。サマルカンドに向かう入り口の町、ジザフへ直行する方向のことである。そこまで 110km なので距離は記述に一致する。現在では農地が広がるが、19 世紀の終わり頃までは飢餓草原と呼ばれた所で、G.の表わす通りである。水草の多いシル河沿いに行くと河の蛇行と農地が多いせいで通行しにくいだろう。すると、飢餓草原の東寄りの路を取ったのではないか。南に見える大雪山はゼラフシャン山脈であろう。

シル河を渡ってからの城

城を何箇所か過ぎているが、特徴が書かれていないので特定が難しい。だが、I.に書かれている最初の城は、シル・ダリヤから 46km ほどのグリスタンであろう。ここで水と草を補給したのだろう。次が 30km 進んだホボス (Hovos) 付近であろう。夜行の後に水も草も多い地帯に着いたので、安心して半日ほどの接待を受けている。J.の地点は推測でき、ガラオロル (Gallaorol)、40.02N67.59E である。記述の通り、平地を河が南北に流れている。ガラオロルまでに 2 城過ぎたのは、1 つがホボスから 60km 地点のザブダルで、もう一つはジザフであろう。ジザフは宿泊せずに通り過ぎて、その日の内にガラオロルに着いたのだろう。東から来て、ジザフの町から川沿いに山地を進んでガラオロルまで 25km の距離がある。それを半日と言っているので、一日 50km ほどの速度で進んでいる。

サマルカンドへ

ガラオロルで宿泊し、次の日は 56km 進んだジョンボイ (Jomboy) 泊りになるだろう。サマルカンドの直ぐ東である。サマルカンド旧市街は現在の町の北方で、標高 700m ほどである。城の中の丘に耶律阿海が住んでいたという表現が本文にあり、その丘が地図上で見える。これからすると、一行はサマルカンドの一番北、現在の飛行場のあたりに到着したかと思われる。ジョンボイから 10km、0.2 日である。例によって、城主耶律阿海などの大歓迎を受ける。11/13 にシル・ダリヤ発で、18 日にサマルカンド到着の 6 日間である。到着日は即ち大歓迎会があり、いつものように午前中早くに到着しただろう。実質 5.2 日ほどである。出発からサマルカンドまで 260km ほどなので、平均 50km/d となる。騎馬行であるが、非常にゆっくりしている。季節的なものであろうか。

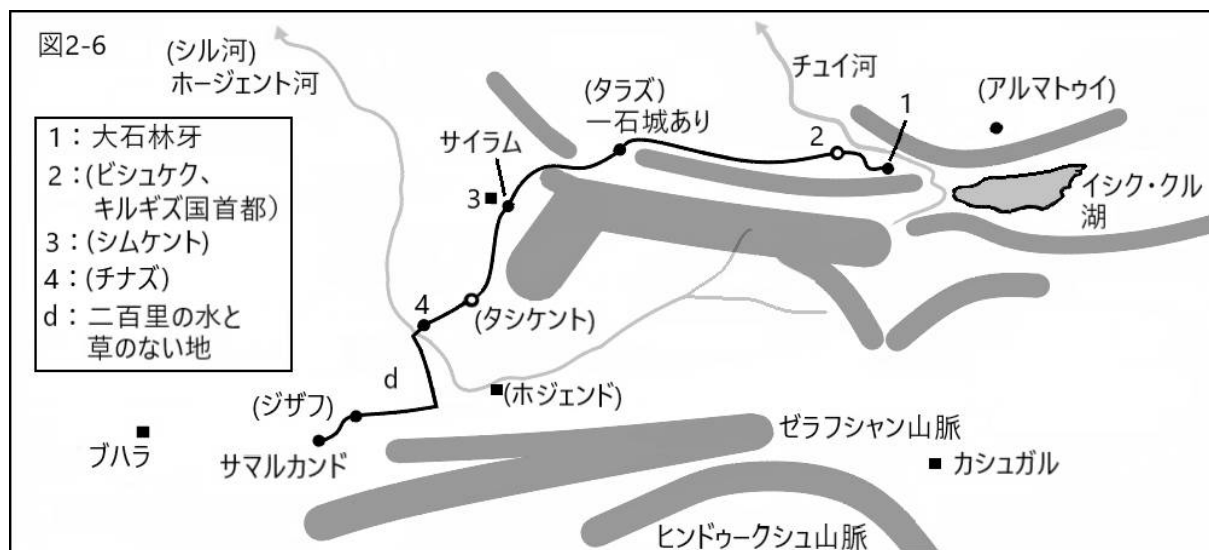
旅を案内していた劉仲録は先行して城に着いており、「これから千里の先に大河があり、舟橋を架けていたが賊に破壊された。冬の最中であるし来春を待つて皇帝に謁見した方が良い」との情報をもたらした。それに従って冬をサマルカンドで過ごす事になった。閏 12 月を過ぎようとする頃、先に出していた劉仲録の偵察隊が帰って来て、「壊されていた舟橋は第二子ジャガタイが修復し賊を滅亡させた」と告げた。さらに、ジャガタイが言うには、「皇帝は大雪山の東南に駐屯し、今は雪が山の入り口を百余里も閉ざして行くことができない。ここは行在への道に当たっているから、自分のもとへ師をお連れして来なさい」とのこと。真人は、ここから先千里は米麦蔬菜が手に入らないことを理由に、サマルカンドを離れるのを断った。

距離と日数のまとめ

大石林牙、タラズ間距離は 360km。7、8 日掛かっているので、7 日なら 51km/d、8 日なら 45km である。タラズからサイラムまで距離は 165km である。5 日かかっているが、城主に歓待されているので、実質 4.2 日とすれば、39km/d になる。前の行程より速度が更に落ちているのは、虚静先生の調子がますます悪くなったためだろう。11/6 サイラムを出て、7

日間でシル河を渡り西岸に着いている。距離は 210km であるから速度が 30km/d となる。少し早いが牛車行である。舟橋があったので渡河日数は見ないで良く、対岸着は 11/12 である。

シル・ダリヤ西岸を 11/13 夜に出発→グリスタン着 11/14→(以下昼行)ホボス付近着 11/14→ザブダル着 11/15→ジザフを経てガラオロル着 11/16→ジョンボイ着 11/17→にサマルカンド到着 11/18 になるであろう。6 日の行程で距離は 260km である。ただし、6 日目は 10km 程しか移動していないし、I.でも半日ほど費やしていると思われるので、5 日以下と思われる。ざっと 4.5 日と見ると、速度は、58km/d となる。



2 章まとめ

- ① アルタイ越えの部分は、総行程をざっと述べ、それに続けて、詳しくその部分を記述する形式が数か所あった。二座の赤い山の部分もそうである。
- ② ウルムチから東に延びる天山山脈の支脈が南北の交通を阻害しており、大砂漠中のハミ市から和州までの 400km 近い区間に、道路と経路表示は 3 個所しかない。また、大砂漠中の通行痕は真っ直ぐ目的地に向かっておらず、山脈の形に添って伸びている。地図上では不思議に思えるが、これは同じ標高の所を進んでいるためのようである。トルファンは海面以下の所もある盆地なので、真っ直ぐ進むと道が傾いていて進みにくいのだろう。目的地の真北あたりに達してから 90° 向きを変えて下って行く方が、進みやすいと思われる。
- ③ 西ウイグル国の首都であったベシュバリク城は、北庭故城ではなく、ウルムチとなった。
- ④ 輪台とジャンバリク城は同一地の異名であった。ただし、三個の峰が突兀として天にそびえるのが見えたところを瑪納斯（マナス）県で確認する必要がある。
- ⑤ アルマリク城は通説通り、伊寧市（伊犁哈萨克自治州）である。中国では霍城としているが、時代による変遷もあるかも知れない。
- ⑥ ジャンバリク城からサイリム湖の直前である天山の北に至る経路や日数も、今回ののはっきりと判断出来た。難航した砂漠横断は昼夜兼行で進んだとあるが、計算上では 2 日要

している。これは、翌日が全休日だった為と考えられる。

- ⑦ イリ川を渡る地点は、現在の地図ではアルマトゥイから北方に延びる道路の延長線上しか見当たらない。しかし、これは近年カプチャガイ貯水池が出来たためである。南から流れてくる支流のシリク川は上流にダムがあるほど水量のある川であり大きな扇状地を作っている。イリ河との合流点付近は複雑な水路となっていて、ここより東で渡河するのは、昔から楽ではなかったと想像する。
- ⑧ シリク川より西の両岸には川に向かう通行痕が何カ所も見える。貯水池が出来た以前の詳細な地図があれば、更にハッキリと確認できるであろう。43.87N77.97E の町遺跡のようなものの調査は出来ているのだろうか。
- ⑨ イリ川を渡ってから到着する山北の小城を現アルマトゥイと考えていたが、今回再考すると、そこまで行くには行程距離が長すぎるし、その後大石林牙に行く速度が、牛車にしても遅くなりすぎる。アルマトゥイの 100km ほど東の位置と考えないと、つじつまが合わない。具体的な位置として、現タタカラトゥリクという小村に小城があったと想定した。この村についての情報がないので、あくまで仮定である。
- ⑩ 大石林牙方向に向かう道はカザフスタンとキルギス国境線沿いの山道で、現在ほとんど使用されていないのだろう。だが、山脈を越える道路と通行痕は明瞭であり、宿駅だったとおぼしき家屋や広場がいくつか山中にある。何時の時代まで使用されたものであろうか。
- ⑪ 大石林牙は現在のオン・ビル・ジュルガの集落と推定した。
- ⑫ 牛車の行程速度は草原地帯であれば 28km/d 出るようだが、山間部は別として、農耕地帯で街道が整備されていないような地域ではかなり落ちるようである。又、夏と冬で日照時間によっても進行時間に差が出るようだ。チンカイ城まではずっと牛車行であったが、アルマリク城からは騎馬行をしばしば用いている。ただ、限定的で、平坦な草原地帯ではできるだけ牛車を用い、砂漠地帯や高低差の大きい難所に限って馬を用いる傾向がみられる。だが、高山越の大石林牙に至る道は牛車である。

第 2 章了

第3章 チンギス・カンの元へ向かう

冬が過ぎ春を迎えた。真人たちはモンゴル軍属従の漢人一同と共に現地の自然の美しさを満喫し、詩作を楽しんだ。三月上旬、行宮から帰って来た阿里鮮（河西の人）が道程を語った。「春正月十三日、ここを発して駆けること三日で東南に鉄門を過ぎ、また五日にして大河を横切り、二月一日東南の大雪山を過ぎた。積雪はなほだ深かった。そこから南に三日で行宮に至った。数日滞在して帰って来た」。これを聞き真人は腰を上げた。

3. 1 鉄門を経てアム河へ

- A. 三月十五日、行を発し、四日目にケシュを過ぎた。万戸ボウルチュがウイグル兵千騎を率いて護衛した。
- B. 鉄門を過ぎ東南行して山を越えたが、山は高大で石が縦横に散乱していた。兵士は車を挽き、進む事二日にして山前に達し、流れに沿うて南行した。ここで軍は北に進んで賊を掃討した。
- C. 五日にして小さい川に至りを舟で渡った。その兩岸には木が多かった。
- D. 七日目には舟で大河を渡った。河はアム・ムレンであった。

出発

真人は門人 3 名を館に残し、5, 6 名の弟子たちを連れて道案内人と共に 3/15 (1222 年) に出発した。4 日で過ぎたケシュは、関口の図によれば、現在のシャフリサブズ(Shahrisabz)であり、サマルカンドから現在の街道沿いに 85km ほど南にある。そこを過ぎたとあるので地図で見ると、15km ほど南にヤッカボグ(Yakkabog)がある。関口図にはヤッカ・サライとある。そこで宿泊したと推定する。ほぼ 100km を 4 日で来ているので一日当たりの進行速度は 25km/d となり、牛車での移動であろう。到着日は 3/18 となる。ここから、かのボウルチュがウイグル兵 1,000 騎を率いて付き添ったのだから、大変な警護振りである。

なお、ボウルチュとは、まだ結婚前のチンギス・カンと知り合い、第一の友人にして部下となった人物であった。

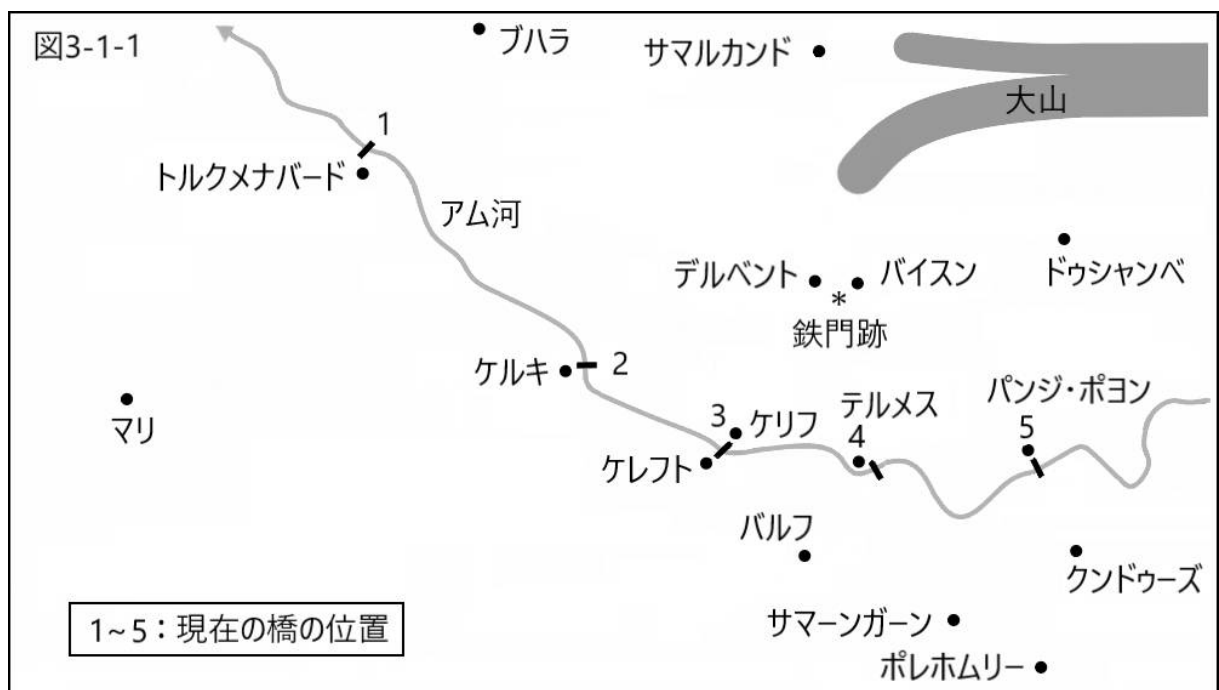
鉄門の位置

鉄門は、サマルカンドからバルフ方面に抜ける古代の重要な隘路にあり、鉄で補強した門があったのでその名がついたという。ウズベキスタン山中のバイソン(Boysun)の西にあったとされているが、位置は確定していないようだ。デルベント(Derbent)の村との中間あたり、38.16N67.11E の位置と想定しておく。標高 1,000m ほどである。

チンギス・カンの行在位置の推測

ヤッカボグから行在までの経路を考えたいが、想定が難しいので、先にアム河を渡った地点を考える。河の中流は幅が 1km を越える所のある大河である。数人ならともかく、多くの人が渡れる地点は決まっていいただろう。重要な街道上にあって、舟は勿論、舟大工、船頭がおり河宿などもあったはずだ。そんな重要地点は昔も今も変わっておらず、現在はそこに橋が架かっているのではなかろうかと考えて、上流から下流まで見ていった。図 3-1 に示すように、候補となる地点は 5 つあった。1 つはブハラ西南、トルクメナバードの直ぐ北に

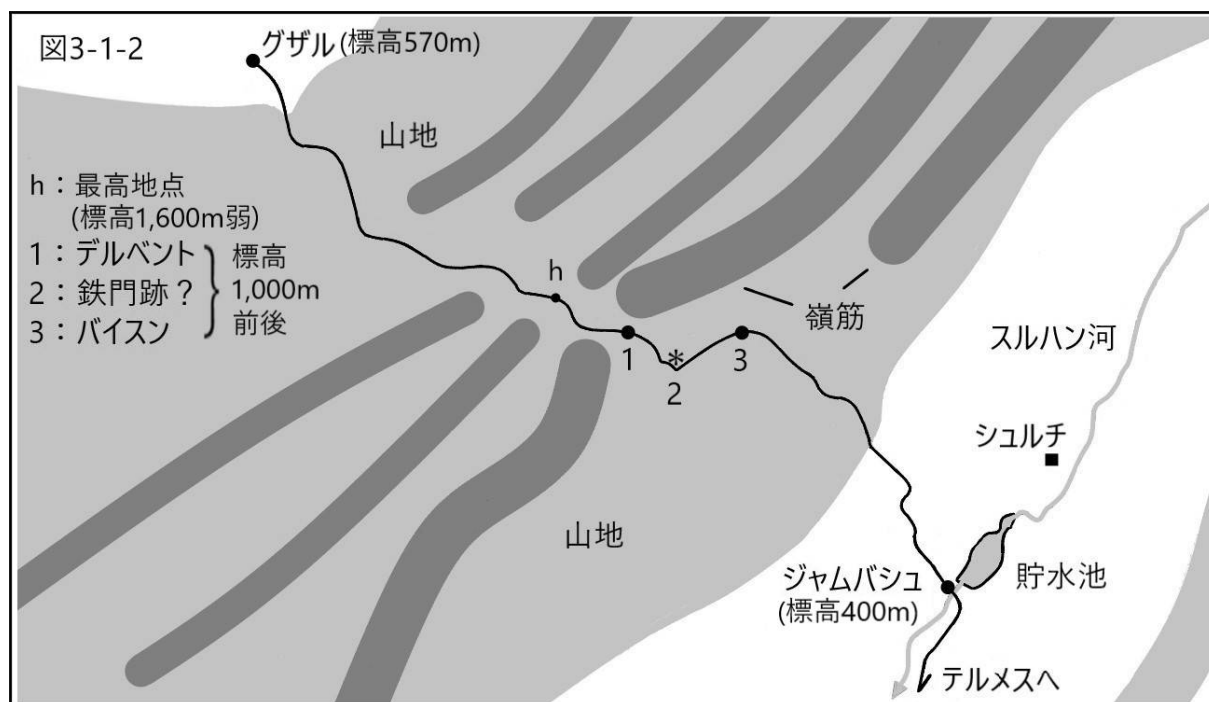
あり、鉄道橋もある。中近東に繋がる幹線路であり、今回の検討には関係ないだろう。2 つ目は 37.84N65.23E にあり、ケルキ（英語表記は *atamurat*）と表示されている町にある。ここもちょっと離れている。3 つ目はケリフと表示がある所で、対岸にはケレフトとある。これは道路橋ではなくパイプラインを渡す橋のようだ。近くに大きな町はないが、ケレフトからバルフの町に向かう道があるので、渡河点として重要だったはずだ。4 つ目の橋はテルメス（Termiz）という大きな町の東郊にあり、アフガニスタン＝ウズベキスタン友好橋の名がある大橋が掛かっている。ここは河港もある大きな町で、アム河交通上の重要な町のようなものである。5 つ目の渡河候補地点はテルメスの東 115km、37.20N68.60E 地点である。6 年前には兩岸を結ぶ道路標示だけだったが、2007 年に橋は掛かっていたようである。北のタジキスタン側の町はパンジ・ポヨンという。土地の人はこの辺りから上流のアム河をパンジ河と呼んでいる。橋の名はシルハン・バンダル橋とあり、アフガニスタン側の橋元の町名である。4 番目と 5 番目の渡河点から北に進むと、現タジキスタンの首都ドゥシャンベに達する。南に進むと標高 4,000m に達するヒンドークシ山脈の峠を越えて、現アフガニスタンの首都カブールに達し、その先はインドである。前年、チングス・カンはこの山脈を越えてホラズム王ジャラルウッディーンの征討作戦を行っていた。2 つの地点は川幅が 500m ほどに狭まり流れが複雑でなさそうな所にある。一行の進路は鉄門を東南に越えてからアム河を渡るので、渡河地点はテルメスの可能性が高い。また真人一行は来た時と違った道で、大山を越えてサマルカンドへ帰還している。3 のケリフ経由では直接北方の大山に向かえないので、帰り道は 5 の地点で河を渡ったのではなかろうか。そのまま北に向かうとドゥシャンベを経て、ゼラフshan 山脈に向かう。これを越えるとゼラフshan 川が西に流れており、それに沿って下るとサマルカンド方向に向かえる。こうして見ると、行在の場所は、4 と 5 の地点の南で、そう遠くない所にあるはずである。



二つの鉄門

以上のような考えのもとに、B、C、D の文章を、次図の鉄門付近の地形と照らし合わせた

が理解できない。鉄門跡を越えると山勢高大どころかむしろ山を越えてなだらかになっている。山を越えたから前山に着いたと言っているのだろうが、どの地点なのか見当がつかない。



上図をよく見ていると、ここでの鉄門というのは2の地点ではなく、平野部にあるグザル町(Guzor、38.61N66.26E)のことを言っているとしか思えない。そこから道が東南に山の中に伸びていて、正に山は高大の地形である。坂道が続くので兵が車を牽いたであろう。鉄門をグザルと考える理由は、元史の太祖十六年、「夏四月駐蹕鐵門關」とある記事にもよる。チンギス・カンが本来の鉄門がある山の上の狭く不便な所に駐屯したとは思えず、グザル付近と考えるのがふさわしい。本来の鉄門跡に至る道を扼するような位置にグザルがあるので、鉄門関あるいは単に鉄門と呼ばれていたのではなかろうか。このように解釈しないと鉄門関が理解できない。

前山

前山に出たとあるのは、山の一番高い所を越えて、視界が開けた地点に達したとの意味であろう。とするとデルベントがそれに合致する。村の中に南に向かって小さい河も流れており、それに沿って道も続いている。北に向かっての山道もあるので、軍が北の山に入って賊を破った、との記述にも適っている。ここまで2日で至ったと言うのだから、既にサマルカンド基準ではなく、鉄門関即ちグザル基準の日数である。95kmあるので、進行速度は48km/dとなる。ケシュを過ぎた地点で騎馬兵が警護に付いているので、真人一行も以後は騎馬行であったのだろう。ヤッカボグからグザルまでの距離は平地の58kmなので、騎馬で一日の距離と考えて良い。

小河とアム河

前山であるデルベントから鉄門跡の位置を過ぎ、バイスンを経て道形に進むとスルハン河(Surkhan darya)に出る。現在は大きな人造湖がある。その北と南のどちらに出たかと考

えれば、やはり南のジャムバシュの町に出たのではなかろうか。河の中は広い所で 50m ほどだが水量が多いようなので、舟でしか渡れないだろう。「五日で小河に着いた」とある地点に違いない。舟で渡るのだからそれほど小さい河でもない。ただ、現在の川筋はかなり整備されているように見える。前山からここまで 90km を 3 日掛かっているが、下りの山道なので本来 1.5 日位の距離である。北に入って賊を討ったのを待っていることで 1.5 日を費やしたのだろう。そこから河の東岸を道形にアム河方面に向かい、テルメス (Termiz) の河港あたりに着いたと思われる。ジャムバシュから 80km あり、2 日掛かっているにしては速度が遅い。恐らくスルハン河の渡河の時間に半日ほど要したのだろう。アム河は大河で、河巾はこの辺りで 1km ある。渡河には恐らく翌日丸 1 日要したのではなかろうか。川の対岸はわずかだがウズベキスタン領になっており、通行痕がいくつかハッキリと見える。ここへ着いたのだろう。

行程のまとめ

サマルカンド発 3/15、牛車行 4 日→ヤッカボク着 3/18、騎馬行 (以降騎馬) 1 日→グザル着 3/19、2 日→前山 (デルベント) 3/21 着、3 日→小河渡河地点着 (ジャムバシュ) 3/24 着、2 日→テルメス着 3/26 日、渡河 1 日→対岸着 3/27

3. 2 チンギス・カンの行在に至る

- E. そこから東南に道を取り、夜になって古い運河のかたわらに宿したが、そのあたりには蘆が繁茂し、一面に地を覆っていた。
- F. 少しく南に進んだが、山中に大なる実心竹が生じ、士卒はこれを採って戟 (槍のようなもの) を作った。時に三月二十九日であった。
- G. さらに四日にして行在に着いた。皇帝はカラホトを出迎えさせた。時に四月五日であった。
- H. … (この間チンギス・カンとの会談の様子) …。そこで別の道によって還り、大山を経たが、その山には石門があった。…流れははなはだ急で、ある騎士が驢馬に鞭うって渡らせようとしたが、その驢馬は溺死してしまった。…この地は関所であったが、蒙古兵に破られたのである。
- I. はじめ師が三月の末に来たときには草木繁茂し羊と馬はみな越えていたが、詔に従って帰ったのは四月の終わりで、百草すでにことごとく枯れていた。
- J. 毎日宵の涼しい時に乗じて進んだ。五、六日にしてふたたびサマルカンドに達し、諸官人の出迎えを受けて館にはいった。時に即ち重五の日 (五月五日) であった。

古い運河の傍ら

出発したのは渡河の翌日 3 月 28 日で、夕方になって古い運河の傍らに泊っている。蘆が生い茂っていたという地点をテルメスの東南方向に探ると、ホルムの村、36.70N67.70E しかない。水路でできたと思われる特有の構造や、この辺りでは他のどこよりも緑の濃いことが記述に一致している。テルメスの対岸から現在の道に従って 75km ある。速度が遅めなのは砂質の道だからだろう。夕方についたという理由であろう。

少し南下した所

前日の到着が遅かったせいか、少しだけ南に進んだとある。時間が余っていたのか詩を作っているが、地点を暗示するような語句は無い。実心竹とは竹のように太い葦のようで、ペルシャ湾地区にはあるらしい。青黒い大きなトカゲは地点の判断の参考にならない。ホルムより少し南に進んだ街道沿いで、実心竹が生えているほど緑が多い地点は一ヶ所、ホルムから 17km のサイヤド、36.59N67.77E である。ここが 3 月 29 日の宿泊場所であろう。

行在の位置

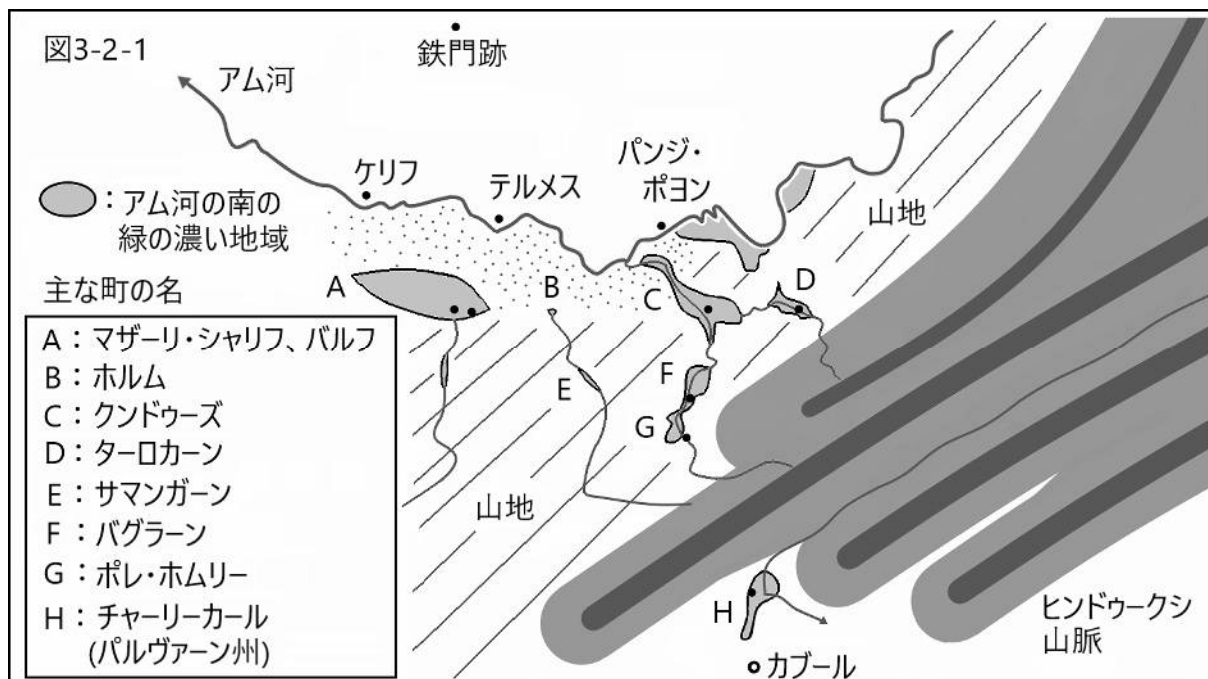
サイヤドから騎馬 4 日で行在である。山道なので 60km/d の速度とすると 240km 以内にあるはずである。図 3-2-1 に、アム河の南で、かなりの人と牛馬を養える平原を表示した。アム河のすぐ南は砂漠か土漠が数十 km の幅で広がっている。そのまた南は岩山に近い山地で、水量の多い川の側だけに農地がパッチ状に広がる。ホルムから街道を南下して行くと、サイヤドを経てサマンガーン村で代表される緑の濃い村々を過ぎて、盆地平原に達する。その東南の隅にポレ・ホムリー (Pol-e Khomri) という町がある。ここから南へ街道が延びて、ヒドゥークシ山脈の標高 3,500m のサラン峠を越えるとカブールの北の平原 (パルヴァーン州、パルワーンとも、州都チャーリーカール) に出る。ここは距離が 260km と遠いし、ヒンドゥークシ山脈によって北方に展開する友軍から遮断された地形である。安全が確保できず、冬営には全く不適である。北に目を向けると、盆地中央を北流しているクンドゥーズ (Kunduz) 河が山のくびれを抜けた所に、再びバグラーン (Baghlan) という盆地平原がある。河はこの盆地の北部で 15km ほどの狭い曲がりくねった峡谷となる。これを抜けるとクンドゥーズの平野を潤してアム河に合流する。ポレ・ホムリーとバグラーンの二つの土地はクンドゥーズ河の水に恵まれて緑が濃く、山に囲まれた要害の地である。この辺りが行在のあった場所と考えて間違いないだろう。これを裏付ける二つの記事がある。一つは先と同じく元史の太祖十六年の記事で、秋帝攻班勒紇等城とある。班勒紇は現在のバルフで、秋にそこを攻めた後、近くで冬に兵と牛馬を養える緑の多い平原を求めればこの辺りになるだろう。ドーソンの書には、ジェラル・ウッディーンを掃討したことに触れた後に、チンギス・カンがバグラーン地区に夏営地を定め大行李を残していたとある。大行李を残していたのは地形が保管に適していると判断したからであろう。この盆地を見ると、東西を山に囲まれ、河の流路である南北だけがわずかにポレ・ホムリー盆地とクンドゥーズ平野に開き、極めて守りやすい地形である。東の小さな山脈はヒンドゥークシ山脈から吹き下ろす風を防いでいる。発達した扇状地があって家畜の飼養に良く、クンドゥーズ河により水の心配もない。要害の地の上に南北に道が通り、情勢によって軍の展開方向が選べる。行在の場所にふさわしく、通年の根拠地にしていたのだろう。町の中心部の標高は 500m ほどである。そこから 10km ほど北に、小さな川から広がった扇状地があり放牧に良さそうである。全くの想像だが、小高いこの辺りにチンギス・カンは行在を設けていたのではなかろうか。

本稿は、バグラーン盆地にチンギス・カンの行在があり、ここで長春真人とチンギス・カンの最初の会談が行われたと結論する。

サイヤドから行在まで、ポレ・ホムリーの盆地を経て 130km 程である。山道であっても普通なら 3 日ほどしかかからないのに 4 日掛かっている。道が細いので、重臣たちを先に通すために時間調整していたのかも知れない。日程は次のようになる。3/28 にテルメス対岸を出発、騎馬 1 日でホルム着→3/29、騎馬半日でサイヤド着→3/30、騎馬で 4 日進み、4/3 バグラーンに行在着→4/4、待機→4/5、カラホトという大臣が一行を迎えに来て最初の会談。

1 日ほど間を置いて迎えが来ている。これは先ず真人に同行して来た重臣たちとの占領地

情勢についての会議が優先されたものと思われる。同行してきた鎮海は真人一行に先んじて到着し、征服地の動静や運営についての会議をおこなったのだろう。その為に、真人たちが待たされたのではなかろうか。一行の進行速度が遅めであるのは、細い山道を順に行くために隊列が長くなったからかも知れない。



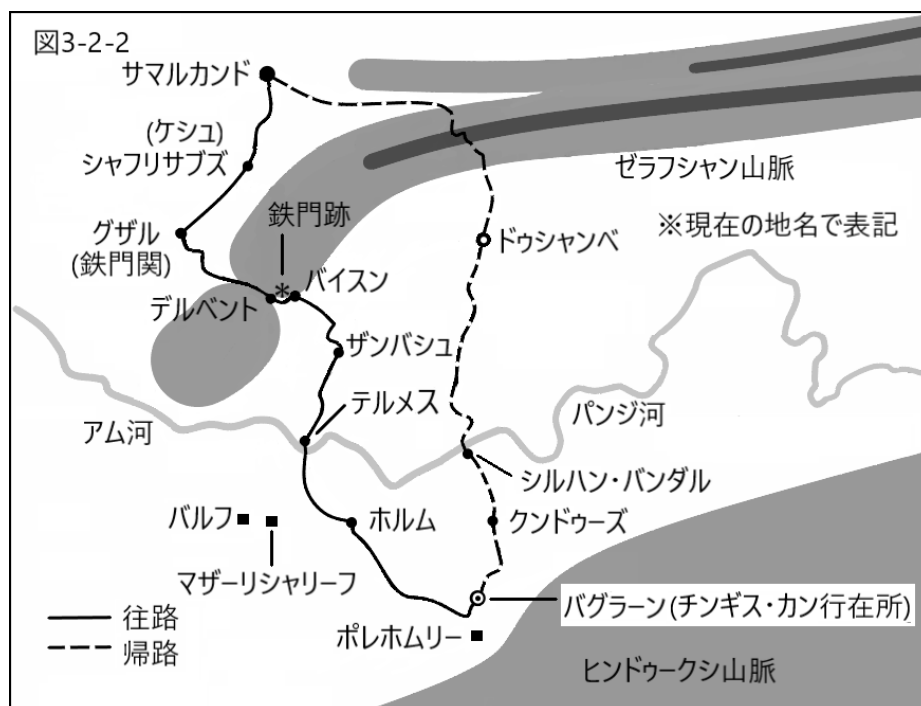
チンギス・カンとの会談

1222年4月5日、長春真人はチンギス・カンに謁見した。チンギス・カンは言った。「他国の人を何人か招聘したが誰も来なかった。真人一人、万里の道を越えてやって来た。非常にうれしい」。真人は答えた。「これは天のしからしむところであります」。次いで、「真人が遠くから来たからには、何か長生きの薬を持って来たのではないか。あれば私に与えよ」と言った。真人は直ちに答えた。「衛生の道はありますが、長生きの薬はありません」。チンギス・カンは率直なその答えを良しとした。このようにして、最初の会談が終わり、四月十四日、改めて詳しく全真教の法理を語ろうとした。ちょうどその折、賊の反乱が勃発し、チンギス・カンが親征することになった。征討に時間がかかると思われたので、半年後の十月の良き日に行うことに改めた。真人は秋までの長い期間この地に留まることを好まなかったため、一度サマルカンドに戻ってみたいと告げた。チンギス・カンは再度ここまで来るのが大変ではないかと言ったが、「二十日あればまた来ることが出来る」と答え、来る時とは別の道をたどって帰ることになった。

サマルカンドへの帰還路

来た時と違う道で帰ったとあり、地点の情報は、大山、石門、急流である。行在の出発日だが、二十日で来られることからして、帰りの日数もそのくらいであろう。「五、六日にして」とあるのは帰路の全日数ではない。サマルカンド到着日の5/5から逆算して、会談が予定されていた4/14を少し過ぎたくらいに帰途に着いたのではなかろうか。先にアム河の渡しで述べたように、5つ目の地点でアム河を渡って帰ったと想像する。北に進み、現在のドゥシャ

ンベを経て、ゼラフシャン山脈の最高点 3,500m の峠を越え、谷間を流れるゼラフシャン河
 添いに西に進んだのであろう。溪谷を下ればサマルカンドの東に出る。なお、ドゥシャンベ
 からサマルカンドまでの距離は 290km ほどである。険しい山岳路を経由するので平均騎馬
 行速度を 50km/d とすると 6 日となる。五、六日にして、とはドゥシャンベからの日数であ
 ろう。



3 章 まとめ

①大石林牙からサイラム到着まで騎馬行の速度が以前より低下している。タラズまでは地形の影響かもしれないが、その後は虚静先生の体調悪化によるものだろう。先生は何とかサイラム城に到着したものの 4 日後逝去し、一行の中でただ一人漢土に戻れなかった。同行の仲間の気持ちはどんなだったであろうか。

②鉄門関の言葉は、バイスン西の本来の鉄門を指す場合と、グザルを指す場合とがあった。グザルは鉄門に向かう登り口を制している位置にあるので、鉄門関と呼ばれたのだろう。

③チンギス・カンと長春真人の最初の会談地としては、従来パルヴァーン（パルワン）やタ

ロカーン（タロカン）が推測されてきた。だが、パルヴァーンは北方を標高 4,000m のヒン

ドゥークシ山脈に遮られて、山脈の北にいる味方から隔離され、南方は、退けたとは言え敵

側の領土で、遮るものは無い平野が続く。冬营地として向いていないことは明らかである。ターロカーンはクンドゥーズ方面にしか出られない蛸壺のような土地で、安全ではあろうが活動が制限されている。これらをチンギス・カンが選んだとは思えない。

④真人一行の帰路は北のクンドゥーズを経てアム河を渡り、ドゥシャンベを経て、ザラフシ

ヤン山脈を越、谷間を流れる河添いに帰ったと思われる。現在最高点にはトンネルがあるが、古道の跡を見ると激しく屈曲しながら最高点は 3,000m を越えているようである。馬の背に乗っているとは言え身体に応えたであろう。

第4章 シル河の行在

4. 1 再度行在へ

真人はサマルカンドに帰った。訪れる者も少なく、夏をゆっくりと過ごす。八月、次の訪問時期の内合わせに行っていた使者が七日に帰って来て、チンギス・カンの意向を告げたので行在に向かって出発することになった。

- A. 八月八日に出発した。大師（耶律阿海）は数十里まで見送ってくれた。……。十二日ケシュ城を過ぎた。十三日には護衛の歩卒千人、騎馬兵三百を伴って大山の中に入った。これは鉄門関とは別個の道である。
- B. 赤い水の澗を涉った。高さ数里の峻峰がそびえていた。谷の東南を行くと麓に塩泉が流れていた。また、東南の分水嶺に登って西を眺めると、高い溪谷を氷が覆っているようであったが、じつはそれは塩であった。山上の紅塩は石の如くであった。
- C. 十四日鉄門関の西南の麓に着いた。その山を出ようとする所にある山門は峻険で左の崖が崩れており、水は地下を一里ばかり伏流している。
- D. 翌日、中秋の日、川（アム川）のほとりに着いたが、その水勢は黄河の流れのごとくで、西北に向かって流れている。舟に乗じてこれを渡り、南岸に宿した。その西に山寨があり、団八剌（不詳）といい、山勢険固である。
- E. 川をさかのぼって東南に行くこと三十里の間は水なく、夜行した。バルフ城を過ぎたがこの城ははなはだ大きい。
- F. 黎明に食事を終わり、東に行くこと数十里にして北に流れる水流に行き当たり、馬でようやく渡るを得て、その東岸に宿った。
- G. 二十二日には田鎮海の出迎えるに会し、共に行宮に至った。

鉄門

鉄門関が A.と C.に 2 回出て来る。最初の鉄門関は、前章で指摘したグザルのことであろう。一行はそっちに向かわなかった。C.では谷や山間を進んで鉄門関の西南の麓に達しているので、これは本来の鉄門関跡の西南、以前の山前の地であるデルベントであろう。

バルフ城

現在バルフと表記されている町であるから、D.の川もアム川である。

行程の概観

アム川を渡るところから先の経路は見当が付けやすいが、大山に入ってからが分りにくい。まとめると、8/13 に大山に入って、8/14 に鉄門関の西南の麓に着き、アム河着が 8/15 である。わずか 3 日での走破である。以前にグザルから鉄門関経由で進んだ時はアム川に出るまでに、ざっと 270km、7 日掛かっているのである。今回本当に 3 日なら、90km/d で駆け抜けたことになる。以前の道でさえ 50km/d 程度であったのだから、平地のような速度が山の中で出るはずがない。どこかに重大な誤りがある。

出発からの速度を見ると、8/8 サマルカンド発で 8/12 にケシュ（シャフリサブズ）を過ぎたとなっている。以前のとおりにヤッカボクで宿したと考えれば、100km ほどの距離である。

これを 5 日で進んでいるから、速度が 20km/d となって牛車にしても遅すぎる。一方、A.には阿海が数十里即ち 30km 前後送って来たとある。見送れば帰るのだから、その距離はどんなに長くても半日行程である。見送りの距離が正しければ、真人は 1 日に百里ほどを進んでいるはずで、50km/d 以上の速度とならなければおかしい。騎馬行であるから、ヤッカボクまで 2 日で達するはずである。このように考え直すと、8/8 サマルカンド出発、8/9 にヤッカボク到着。8/10 より大山に入り、8/15 にアム河着の 6 日間が、大山を踏破していた日数と考えられる。以前の日数が 7 日であり、1 日くらいは短縮できそうなので、これなら妥当と言えよう。原文を改めてしまう事になるが、阿海大師が見送って来た距離を基準に考え直すところのような解釈になる。

ケシュを過ぎた地点から鉄門関の西南まで

以前の道と違う地点がどこなのか分りにくい。東の山地に入り込む谷の入り口はケシュからグザルまでに 7 か所ほどある。北の 2 つは高山で行き止まりになっているように見える。南の 3 本はグザルに近くて別の道を通る意味が薄い。ヤッカボクから東に伸びる谷に進んだのではなかろうか。O'z という奇妙な名の町から道なりに東に 20km ほど進むとナブ(Nav)の町に達する。経路表示に従い南に進むと Zarmas という村に出る。その辺の土地一帯は赤いので、赤い水の澗とはここかと思う。西南に進み、38.59N66.91E で東南に向きを変え、Kalta と表示がある辺りに出る。ここの西にある山は白く見えるので、山上に紅塩があったというところではなかろうか。ここから先は細長い谷にある村落がとぎれとぎれに南へ続いている。28.41N66.98E 辺りを経てデルベントに出て来たのではなかろうかと思うが、明瞭な道路も通行痕も見えない地点が何箇所もあるので、単なる想像に留まる。前回行在に向かった時、デルベントから軍が北に向かったとある。それを反対方向から進んだのが、今回真人一行がたどった道であろう。距離は良く分らないが 150km 前後と想像する。

鉄門の西南の地

デルベントを越えて山門があった所は関口の図でザハナと表記されているが、現在その名は見えない。38.16N67.05E の Daganadzam のことであろうか。一行の左方向即ち東には険しそうな赤い岩山が迫っているので、この南に関があったように思われる。確かに、水流があるとは見え難い河も見える。そこを過ぎてから、現在 M39 の表示のある道路に移って南下したのだろう。渡河地点は次に述べるようにケリフと思われるので、M39 をまっすぐ行くと大回りになる。山岳部を出たシェラバードからは、現在農地が広がっている平野部を最短距離で突っ切り、最後はアム河の流れに沿ってケリフまで行ったのであろう。デルベントからケリフの港まで 160km あり、3 日の距離である。

渡河点

河が西北に流れていることと、向こう岸に団八刺という堅固な山寨が西にあることからすると、ここは図 3-1-1 で示した 3 番目の地点、ケリフとケレフトである。関口の地図にはケレフト (Keleft) にダグラ・アローサの名が併記されている。これが団八刺と表されたと思われる。川の動きや対岸を見ることが出来るこの岩山に城塞があったのだろう。岩山の東側の河添いには激しい通行痕があり、舟着き場として機能していた様子がうかがえる。ここからバルフ方向へ東に進むには、15km ほど河と並行に進むので、バルフに向かって河をさかのぼるように進んだ、との表現に合致する。それから東南に向かうが、バルフ近くまでの

20km ほどは砂漠のようであり、水が得られないという記述に合致する。ヤッカボクから鉄門関の西南までは道筋がはっきりしないので大まかな数字であるが、300km とする。6 日で走破したのだから 50km/d の速度となる。

北に流れる水流

渡河点から 90km でバルフに達する。ここで食事をしたのでだろう。更に東に進むと、現在はバルフよりずっと大きいマザーリシャリーフの町につく。町の中心から 4km ほど東に北流している小さな川がある。バルフから 23km ほどなので、数十里にて水流に行きあたったという記述に一致する。この河を渡って宿したのでだろう。渡河点のケレフトからは 120km あり、普通なら 1 日半は掛かる距離である。水が乏しいので、馬に飲ませる水が少なくなるよう夜行したのでだろう。宿泊地を以前のホルムだとすると距離が遠すぎ、道路の向きを見ても川の東に宿するとはならない。

ケリフから行在までの日数と走行距離

8/15 にケリフ着で、渡り終えたのが 8/16 午後。そこで宿し、翌 8/17 の夕方出発して夜通し進み、バルフ着。少し休憩と食事後、マザーリシャリーフ東の小川で宿したのが 8/18 午後となろう。ここまで 120km ある。8/19 に出発してからホルムを経て行在まで 200km ある。50km/d の速度で 4 日で行けるので、鎮海が迎えにきたと言う 8/22 にキッチリ合う。アム河を渡ってからの日程に問題はない。

4. 2 サマルカンドに還る

- H. 二十七日（八月）、皇帝は北に向かわれ、途中、師に対ししばしば葡萄酒、瓜、蔬菜を賜った。
- I. 九月一日、舟橋を渡って北行した。師が道を説く期がせまってきたので、太師阿海を呼び寄せられるように申し上げた。
- J. その月の十五日（陽暦十月一日）、帝は立派な幄を設けられ、……、ただ闍里必鎮海、宣差劉仲録が室の外に侍った。師と太師阿海と阿里鮮の身が帳の中に侍った。師は奏して、……、外の二人も帳中に召しいれた。帝は師の説くところを、太師阿海をして蒙古語に訳して奏せしめ、すこぶる満足せられた。
- K. 十九日の夜、再び師を召して道を論ぜしめ、帝はいたく喜ばれた。
- L. 二十三日、また師を幄によび迎えられ、初めの通りに礼を行い、帝は始終温顔をもって師の説くところを聴かれ、侍者をして記録せしめ、且つ勅して漢字をもって誌さしめた。
- M. ついで車駕が東におもむかれるのに扈従しつつ、途中しばしば道を講ぜられた。
- N. さらに数日にしてサマルカンド城の西南三十里の地に至った。十月一日（陽暦十一月五日）師は奏して城内の旧居に帰ることを願われたので、帝はこれを許された。帝は城の東 20 里のところに駐蹕された。この月の六日、太師阿海と共に帝に謁した。

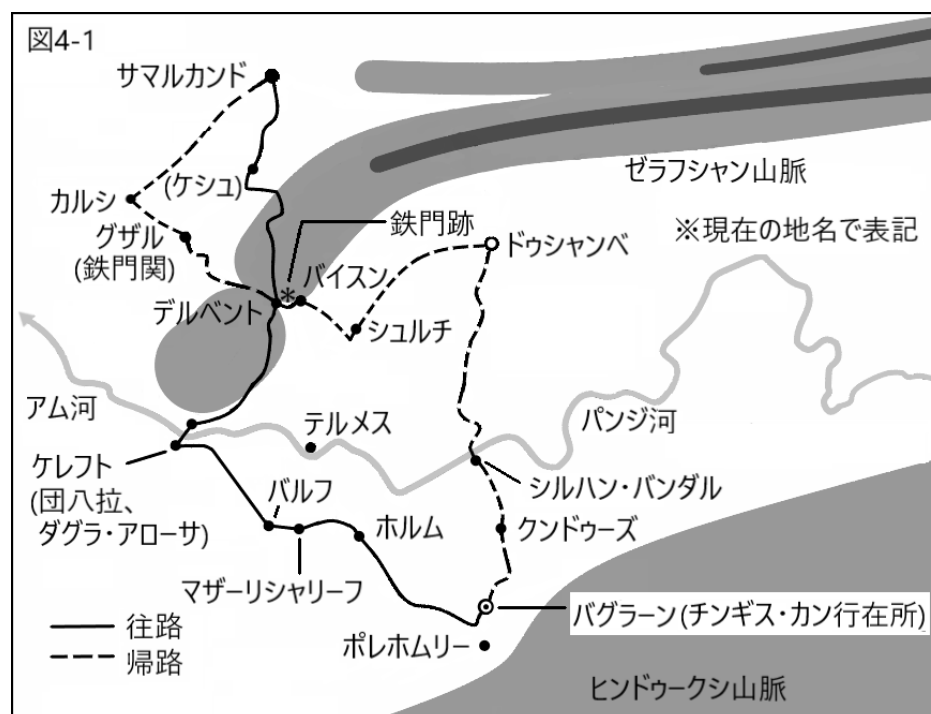
舟橋の地点と移動手段

行在推定地のバグラーンから北に向かった後に舟橋を渡っているのだから、この橋の地点は、以前真人が帰路に用いた渡河地点である。春の雪解け水と夏のモンスーンの影響で水勢

が強かったアム河も秋になって水位が落ち着き、かつチンギス・カンが渡るので舟橋が架けられたのだろう。渡河点までバグラーンから 135km あり、27 日から 9 月 1 日までの 5 日間の移動と考えると 27km/d で、牛車の速度である。M.でも、車駕が東におもむく、とあるし、一月以上掛かってサマルカンド着だから、全行程牛車であろう。

経路の推定

真人一行はチンギス・カンの旅に随伴して帰路に着いた。チンギス・カンは真人の講話を何度か聞きながらの旅で、急いでいる様子がない。行在の地に一年いてインド征服への道を探っていたが、地理的に困難であることが分かって断念したのであろう。征服事業をひとまず終えて、息子や部下たちが征服した土地をゆっくり巡幸しながらの旅ではなかったか。どのような経路でサマルカンドに帰ったのか全く分らないが、最後は東に向かいサマルカンドの西南に到着している。であると、サマルカンドまで一番遠い経路、ドゥシャンベ、鉄門跡、グザル、カルシ経由で帰還したとしても不思議ではない。670km の距離があるが、9/2 から 10/1 までとすれば 30 日間なので、22km/d の速度となる。非常にゆっくりしているのは、巡幸であったことを裏付ける。図に、往復路を示したが、ケシュからデルベントに至る往路と、チンギス・カンに同行してサマルカンドへ帰る道中の、アム河から北の帰路はよく分からない。サマルカンドの西南に到着したことと、日数と距離を勘案して想像した経路を図 4-1 に示す。



4. 3 シル河の行在で講義

- O. 二十六日（十一月）行を起こした。
- Q. さらに三日にして東してホージャ・ムレンを過ぎて行在に達したが、その舟橋が夜中に壊れて舟が流れてしまったことを聞いた。事のあったのは二十八日である。

- V. 二十八日、太師府提控李公が決別に來たので、師は「ふたたび会えるかどうか」と言われた。李公は「三ヶ月経てばまたお目にかかれましょう」と言ったところが、師は、「汝は天理を知らない。余は二、三カ月のうちに東に帰るであろう」と仰せられた。
- R. 帝は震雷のことを尋ねられたので、……（真人は道を講じ、満足したチンギス・カンが太子、諸王たちに、真人の言葉を心に銘ぜよとの言葉を發する）
- P. 十二月二十三日（西暦 1223 年 1 月 26 日）雪下って気温低く、道に牛馬の凍死するものが多かった。
- S. 元旦（西暦 1223 年 2 月 2 日）将帥、医師、卜者らの書簡が來たって師に賀詞を述べた。
- T. 十一日、ついに馬首を東に向け、サマルカンドを東に去ること千余里に達し、大果樹園中に宿した。
- U. 十九日は師の誕生日である。多くの官員が香を焚いて師の寿を祝った。
- W. 二十一日、東に進む事一行程で一大河に至った。この地はサイラムを去ること東北に三行程の所である。この地には水と草が豊富で、牛馬はこれを飽食していた。よってここにしばらく逗留した。
- X. 二月七日、師は皇帝に謁し、「……三歳を経たのでふたたび故郷に帰りたい」と奏した。「朕も東行の途にあるから同行しては如何」と仰せられた。……（この間何度も先に帰りたい旨申し出るが、チンギス・カンはなかなか許可しない。そして、東山の麓で野猪狩猟中にチンギス・カンの落馬事故があった。真人の言により、チンギス・カンはしばらく狩猟を中止する。この間真人の講話がある）。
- Y. （二月）二十四日、師は再び朝を辞することを請われた。
- Z. 三月七日、再び辞去を願った。……。チンギス・カンは「神仙門下の者には一切賦税を免除せよ」との仰せがあり、その聖旨を認めた文書一通に玉璽を押捺されて師に賜った。

***アルファベット順が本来の文の順序であるが、下記の理由で上のように並ぶと判断した。**

文章の整理

以上に書かれた事の一ヶ月前に、チンギス・カン一行はサマルカンドに着き少しの間郊外に駐屯していた。間もなく車駕で行を起し、シル河を越えて直ぐの所、恐らく現在のチナズ（Chinoz）の地に行在所を移した。それを確認して真人は本格的な講話をしようとサマルカンドを發して行在に到着した。それが O.、Q の内容だろう。その時に李公が訪れてきたので、数ヶ月後に帰国するとの意思を述べたのだろう。というのも、本格的な講話を今からここで始めるので、役目が終わり帰ることが出来ると考えたからだろう。講話をした後に、雪で牛馬が死んだことと元旦の記事に続く。だが真人が語り終えないうちに、チンギス・カンは狩猟をしたくなり、東に向かった。真人も同行して正月 11 日に出発した。真人の講義はキャンプ地でも断続的に行われていただろうが、チンギス・カンが狩猟中に落馬事故に合い、行在所で静養した。正月を過ぎてから、そこにチンギス・カンの息子たちや高官が集まって來たので、彼らを交えて真人の本格的な講話が始まった。一月一杯で語り終えたので、真人は 2/7 に帰還を申し出たのだろう。チンギス・カンはなかなか許可しなかったが、その月の終わり頃になって諦めたようである。

大果樹園、一大河、東山

「サマルカンドを東に去ること千余里」の表現を文字通りに受け取ると、行在のあるチナズから真東方向に延ばして 120km 先のアングレン（Abgren）の町の辺りになる。だがその先は山脈にさえぎられるし、さほど話題になりそうな場所でもない。W.にサイラムの東北に達したとあるので、W.の一大河とはタラス河であろう。現在のタラズの南東、キジル・アジル（Kyzyl・Azyl）の町付近で牛馬を飽食させたのではなかろうか。サイラムから 180km、騎馬行でちょうど 3 日行程というのも合致する。

チンギス・カンが狩猟中に落馬した東山はサイラムの東方山地であろう。4,000m 弱の山波が続き、現在アクス・ザバグリ自然保護区になっている。その北の大きな扇状地のように見える平原でチンギス・カンは狩りをしたのだろう。その少し北、キジル・アジルの西 60km に現在貯水池がある。水の豊かな地域なので、その付近に真人が宿泊していた大果樹園があったと思われる。

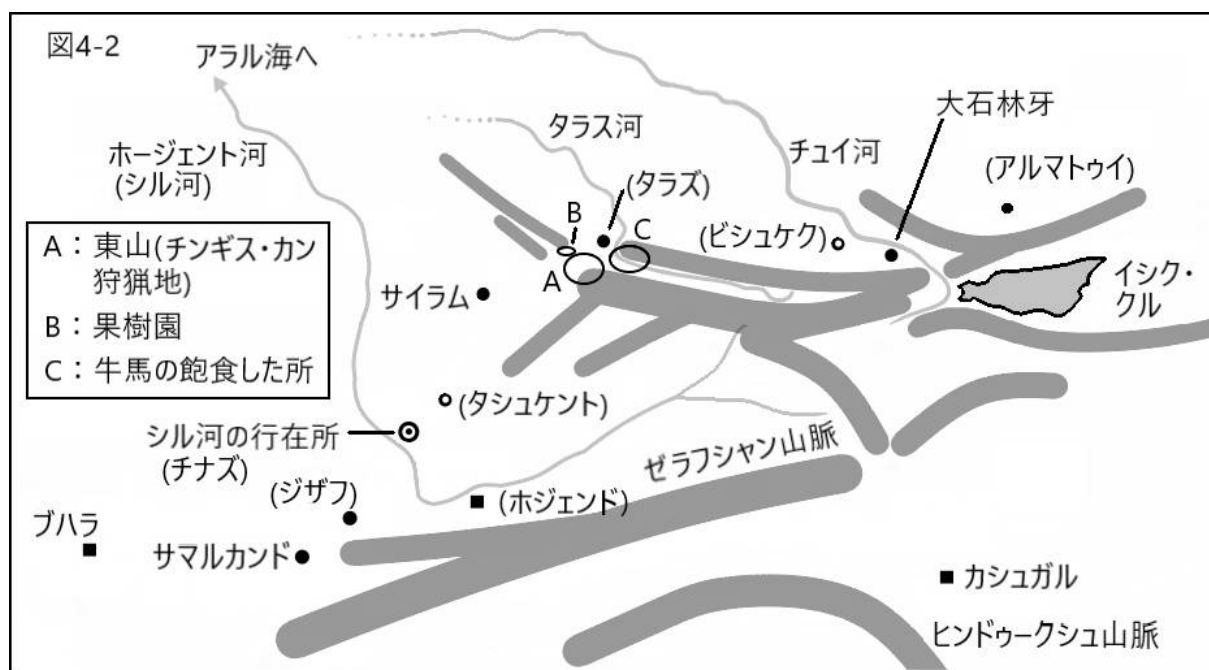
サマルカンドから行在所までの距離と速度

真人一行がサマルカンドからシル河を越えた行在までの行程は 3 日の旅となっている。以前のようにグリスタン経由とすると難しい日程であるから、今回は現ジザフとシル河間を直行したと思われる。だが、この平原は百年ほど前まで飢餓草原と呼ばれていたような所であった。だが、冬の初めの雨と雪で地面に草が萌えと本文にあるから、砂漠も短期間ながら通行可能になっていたのだろう。雪はモンゴル馬にとって水と同じであり草もあったので、以前は無理であった直行経路も可能であったのだろう。距離は 210km だから、70km/d で 3 日の騎馬行は可能である。冬だからこそ馬の調子も良かったのだろう。

チンギス・カンと真人の考え方の違い

チンギス・カンは真人を 3 度行在に呼び寄せた。1 回目のバグラーンでは反乱が発生して親征することになり講話が続けられなかった。2 回目のバグラーン行は、着いて間もなく巡幸を兼ねてサマルカンドへと帰った。3 度目のシル河の行在でも、真人が到着して間もなく、講義が始まった。正月の行事で中断になったのはしようがないとしても、その後真人が講義を続けようと思うと、チンギス・カンは東山へ狩猟に出かけた。チンギス・カンは遊牧民族モンゴルの武人であり、全てのことを移動しながら行うことが普通であった。旅の途上でもキャンプ地でも話は聞けると思っていたのだろう。一方、真人は、哲学に関するような問題は何か所に落ち着いてじっくり話さなければならず、途切れ途切れに話しても内容が伝わらないと考えていたのに違いない。1 回目はしようがないとしても、2 回目も意気込んで出かけたのに、相手は直ぐに移動した。3 回目で、やっと本格的に講義を始められると思ったのに、相手は狩猟に行く。とうとう同行を渋ったのだろう。だが行かざるを得なくなり、T.のように、「遂に馬首を東に向けた」のだろう。イヤイヤの気持ちが、「遂に」に表れているのではなかろうか。双方の生活習慣からくる食い違いを感じて、真人がため息を漏らしているようなのが、文のニュアンスから窺える。チンギス・カンが狩猟中の落馬でショックを受けてシル河の行在所に戻り、静養していた年明けに集中的に講話を行ったのだろう。そして語り終えたので、帰国を申し出たのだろう。2 日目のバグラーン行きの後で、今回の講話で終わらせる、との気持ちに傾いていたので、李公との会話になったのだろう。直接言うには差しさわりがあるので、天理を持ちだしているのだろう。李志常もその辺のことは書かなかっ

たので、文意が分かりにくくなっていると思われる。



4. 4 まとめ

- ①二度目の行在行きも、以前と同じアム河の南にあったバグラーンである。
- ②サマルカンドからアム河に至る経路の日付には明らかに誤りがある。8/8 サマルカンド出発、8/10 大山入り、8/15 ケリフ着、8/22 行在着としなければならない。
- ⑬ ケシュ南から大山に入り、デルベントに至る経路は不明点が多い。一応推測して行程を描いたが、赤い川とか塩の山とかは現地確認しなければならない。
- ⑭ シル河の行在はチナズ付近にあったと思われる。
- ⑮ 真人の講義の際の通訳には、わざわざサマルカンドから耶律阿海を呼び寄せている。通訳としては劉仲録や阿里鮮、更には鎮海もいた。彼らはチンギス・カンと真人の会談の様子を記録していると書かれているので、当時としてはかなりの教養人だったはずだ。しかし、哲学的な内容の通訳はこれら三人に無理だったのだろう。阿海は元々金朝に使えていた契丹人であったが、チンギス・カンの人柄を見込んで配下となった。仕事では北方を担当していたようなので、モンゴル語を覚えていたのだろう。契丹語はモンゴル語と親戚関係にあるので覚えやすかったとしても、漢人の言葉も話している。それも、相当に高度な漢語の教育を受けていたようだ。当時は哲学的な用語に乏しかったと思われる蒙古語で、長春真人の話の内容を分りやすく語れる知性を備えた人物であったと思われる。金国に仕えていたので、金国の言葉である女真語も出来たとして不思議ではない。このような人物がサマルカンドにいて西域総督の地位に居たのだから、現地の言葉、トルコ語も話せるようになっていたかも知れない。ただのマルチリンガリストではなく、チンギス・カンにとってかけがえのない人物だったのであろう。

4 章了

第5章 帰国

5. 1 帰国の途に着く

- A. チンギス皇帝は阿里鮮を宣差に任じ、蒙古帯、喝刺、八海を副使として師の東帰還を護衛せしめた。三月十日、いよいよ朝を辞して行を起こした。タラカン以下はみな葡萄酒、珍しい果実などを携えて数十里の道を送って来て一同泣いて別れた。
- B. 三日目にサイラム大城の東南に達した。この辺の山で長さ二尺ばかりの両頭の蛇を見たが、土地の者はしばしばこのような蛇を見かけると言っていた。
- C. 十五日門人たちは共に郊外に出て、先にこの地に葬った虚静先生趙公の墓を弔った。
- D. 翌日この地を出発した。
- E. また十日でアルマリク城の西百余里の地に達し、大河（イリ河）を渡り、四月五日アルマリク城の東園に至って宿した。

サイラム大城の東南に到着

真人一行はチンギス・カンの手による全真教保護の書面を手にして、3/10 帰国の途についていた。出発地はシル河の行在であろう。サイラムに直行ではなく、その東南に達している。サイラムウガム省立自然公園の辺りであろうか。距離は 180km あり、3 日なので騎馬移動の 3/12 着である。わざわざそこに立ち寄った理由は何であろうか。前年末に、チンギス・カンの狩猟がこの辺りで行われていたとすれば、真人はそこで何か有用な物を見たのかもしれない。両頭の蛇そのものか、貴重な薬草などであろうか。1 日をそれに費やし、3/14 に移動してサイラムに向かい、3/15、虚静先生の墓参りをした。3/16 この地を立った後の行程は来た時の道の逆であろう。ただ、復路の記述は往路に比べて非常に簡単である。人口の少ない地域も通行しているようなので、想像に頼らざるを得ない部分が多くある。

二つのアルマリク城

初めのアルマリク城は日数とイリ河を渡る前にあることからして、往路に立ち寄ったアルマトゥイであろう。往路と同じ経路であろう。ただし、現タラズ、ビシュケクを経たとは思いが、大石林牙には立ち寄らず、チュイ河添いを直行して山脈を越えたのではなかろうか。後の行程でも、帰路はなるべく往路より短くなる経路で進んでいるようなので、そう判断する。アルマリク城の手前 65km ほどに 10 日目に達している。ウジナガシュ町の 1 日行程ほど手前である。サイラムから 600km ほどなので、速度は 60km/d になる。翌日アルマリク城に着けば、着いたと書くだろう。書いていないので、11 日目の 3/26 は城の少し西くらいで宿泊したのではなかろうか。二つ目のアルマリク城には 4/5 着であるから、最初のアルマリク城の位置から 9 日要している。距離から言えば来た時に立ち寄ったアルマリク城、即ち現在の伊寧市である。距離は 480km ほどである。イリ河渡河に半日なので、実質 8.5 日で、56km/d の速度となる。往路ではこのアルマリク城に半日ほど早めに着き、休養や物資補給に当てているようだ。今回もそうした可能性があれば、日数 8 日となり 60km/d の速度である。往路に比べて騎馬の速度が 20km/d ほど落ちている。帰路はこの先もずっと騎馬行なので、一行の疲労を考えて、速度を落としたのだろう。アルマはトルコ語でリンゴの意味である。昔は二つの城とも同じアルマリクであったのかどうかは分からない。

5. 2 チンカイ城まで

- F. おそくなつて天山の前面に至って宿した。
- G. また翌日、ふたたび四十八橋を渡り、溪谷上を五十里進んで天池に達し、東北に進んで天山の後ろを過ぎた。行くこと二日で、往路に経たアルタイ山の南側の大川に沿う駅路に接した。
- H. ふたたびアルタイ山の東南を過ぎ、北の山に沿うて進んだ。
- I. 四月二十八日大雨雪があった。その翌日には全山ことごとく白雪に覆われていた。
- K. また山道を東北に向かい、三日で阿不罕山の前に着いた。往行の時、そこに止めておいた門人宋道安ら九人の者、並びに長春玉華会の一同の衆、及び宣差郭徳全らは遠く出迎え、共に栖霞觀にはいった。

経路の概観

天池に至ったことは分るが、チンカイ城までの記述は非常に簡単である。往路と同じ道で帰ったとすれば、チンカイ城直前では、東へ進むとならなければならないが、K.には東北とある。実際、アルタイ山を東北に越えてチンカイ城へ向かう道が表示されている。往路は白骨甸の真ん中を進んだが、季節的に使える経路ではなかったのだろう。チンカイ城に何日に着いたのかも良く分らない。4/28 大雨雪で、翌日も雪が残っていた。この2日は進まなかったとすれば、それから3日行程なのでチンカイ城着は5/2となる。往路で大歓迎を受けたベシュバリク城では、帰路でも大いに慰労されたとして不思議はないが、他の城も含めて立ち寄ったとの話は一切ない。

天山の前面

ここは天池、即ちサイリム湖に向かって山登りをする直前の平地部であろう。4/6 アルマリク城出発で80kmほどの距離である。本文には、出発前に講演をしてもらおうと引き止める漢人の工匠との悶着や、真人の乗馬が逃げ出したとかの騒動が書かれているので、それらにも時間を食われて遅くついたのである。

天池と天山の後ろ

天池（サイリム湖）に向かう上りの山道を進み、池の東端近くまで行っただろう。三台という地名が古い地図帳にもGMapにもあり、ここに宿したであろう。麓から1,000m高度を上げる50kmの山道で、4/7着である。ここから天山の後ろのボルタラモンゴル自治州まで90kmある。相当な下り道なので1日で進み、4/8着と考える。

アルタイ山の南側の大川に沿う駅路

ここは、来た時に一昼夜掛けて進んだ難しい沙漠の出発点、即ち現在の托托鎮に着いたことを言っていると判断する。アルタイ山の南側の大川に沿う、とある地点は、図2-1に示す金山の東北の地点のことだろう。かなり省略された表現なので書き直すと、「ここから草原の道が始まり、往路でアルタイ山脈を越えた所に流れていた小川、詩作で大河と言って面白がったあの川に繋がっている。仲間が待っている所はあそこから直ぐだ。その取りかかりの駅路にやっと着いた。間違いなくそこに帰ることができる。」、となろう。ここから東は安定した地域との認識があり、安堵感から書かれた言葉と理解したい。前回難行した砂漠は9月だ

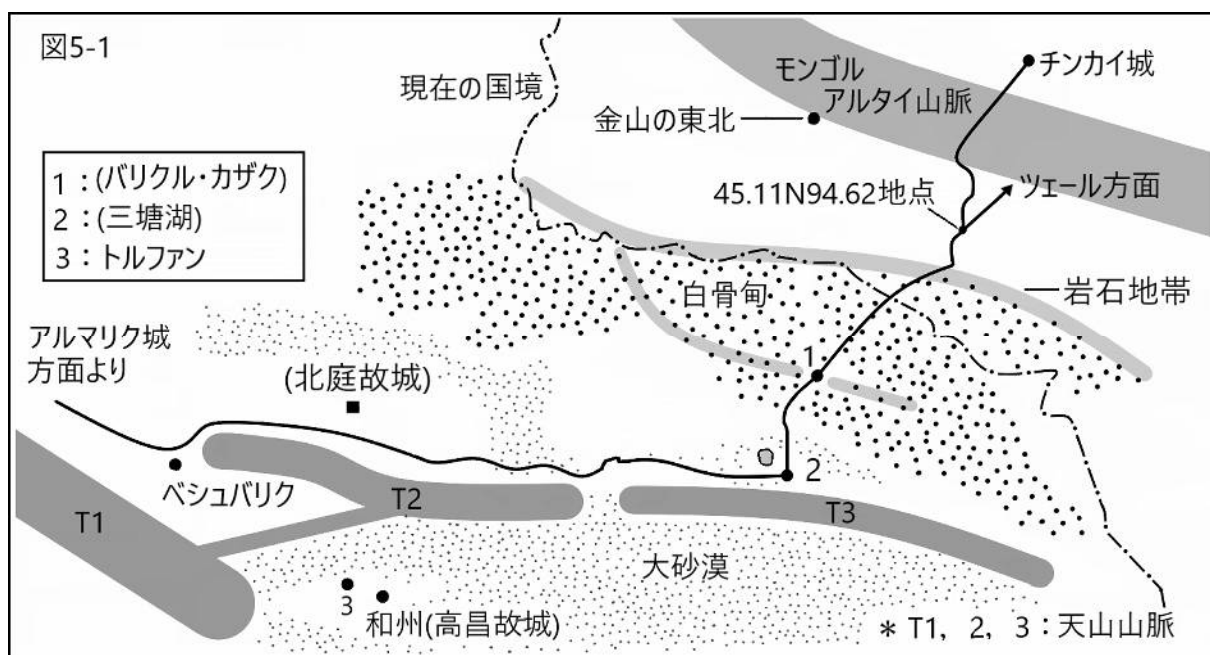
ったので地面が乾いてサラサラして通りにくかったのだろうが、今回は春先なので、地面が凍って締まっており、楽に砂漠を越えられたのではなかろうか。ボルタラから托托鎮までは130km ほどなので、60km/d ほどの速度で2 日要し、4/10 着となろう。

チンカイ城までの経路

この経路では、往路にあったベシュバリク城も和州も出てこない。「帰心矢の如し」の一行は、大砂漠を経由せず、草原の道をひたすら駆けたようだ。ベシュバリク城の北を経る経路、即ち北庭故城方面に進んだと考えたい。そして、三塘湖からは現代の道路表示に従って東北に、中国からモンゴルへ伸びている道に進んだと思われる。その45.10N94.62 地点に、北に向かう経路表示がある。この経路は水場が少なそうだが、春先なので雪解け水が利用できたのだろう。アルタイ山脈を抜けると、東北へチンカイ城に向かう経路表示がはっきりとある。

日程と距離

托托鎮を出たのが4/11 となるので、5/2 チンカイ城到着とすると22 日かかっている。北庭故城方面の草原の路では距離が1,300km なので60km/d の速度となる。もしも、ウルムチ、和州を回ると距離は100km 伸びるので、速度は64km/d となるので、距離の短い天山山脈の北の草原を駆け抜けたと判断する。北庭故城に立ち寄った可能性はあるが、宿泊しただけで歓迎会はなかっただろう。



5. 3 チンカイ城での滞在

5月2日、チンカイ城に着いた一行は数日滞在して英気を養う。残された者たちとの話も尽きなかった。この地方の地理や風俗についても色々書かれている。虚静先生が亡くなったとの手紙が来る前の日に、先生のことを夢に見たとの話も語られる。帰路をどうするかについて議論され、真人一行は往路と同じ経路を避けて、距離の短いゴビ・アルタイ山脈の南を通る経路を選んだ。ただ道中に草と水が乏しいゴビ地帯であるので、三班に別れ数日間隔で順次出て行くことになった。

5. 4 タングット人の国の北辺まで

- L. 五月七日、宋道安ら六人の第一班を先行させた。
- M. 十四日、師はみずから尹子平以下の六人を伴って二番目に出発した。夾谷妃、郭宣差、李万戸ら数十人は二十里の間師を送り、馬を下りて再拝し、泣いて決別した。
- N. 十八日には張志素、李志常ら五人の第三班が出発した。
- O. 師は東行されて十六日には大山を過ぎたが、その山上には雪があり、はなはだ寒かった。弘廬で騎馬を換えた。
- P. 十七日、師は食をとられず、ただときどき汁を飲まれた。東南して大砂漠を過ぎたが、そこには草木もあり、草木の間には蚊や蛇が多かった。夜は川の東に宿した。
- Q. また数日の間、師は時に車に乗られた。(…体調を心配する弟子と、心配するなという真人の会話あり)
- R. さらに砂地の道を進む事三百里、水と草極めて少なく、夜は休まずに馬を進めた。かくて二泊した後には砂地を出た。その地はタングット人の国の北辺の地であった。ようやく天幕の数も多くなり馬も得やすく、遅れて出発した一行も師に追いついた。

大山

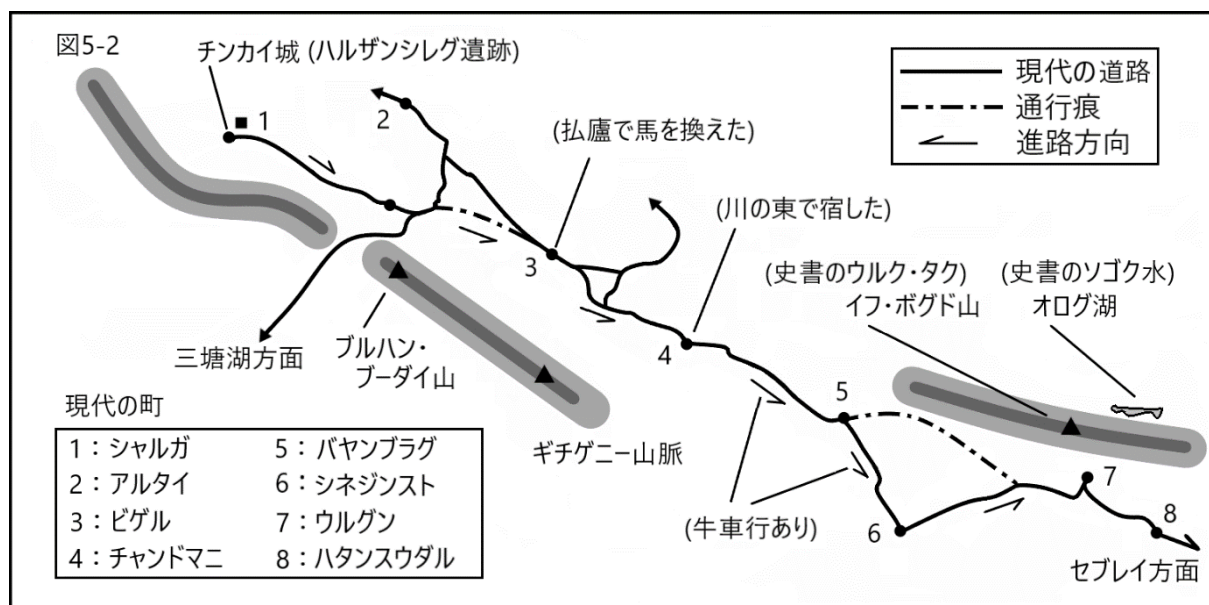
チンカイ城から東に向かったとあるように、出発時に真東に向かう道がある。3 日目に雪を被った大山の麓を過ぎていく。この大山は、アルタイ山脈の支脈、ギチゲニー山脈 (Gichgeniy Nuruu) であろう。主峰である西のブルハン・ブーダイ山 (Burhan Buuday uul) 3,765m、と東の一峰 3,769m に雪が残っていたのだろう。山脈の東に並行するような道があるので、これを進んだのに違いない。初日はハリウン(khaliun)着であろうが、そこから地図上の現在の道を進むとかなり大回りすることになる。45.86N96.60E、45.85N96.73E に通行痕が見える経路で直行し、45.86N96.88E 辺りで宿泊、翌日ビゲルに着いたと想像する。ここに弘廬があり乗馬を換えたのだろう。距離は 170km で、57km/d の速度となる。

三百里の砂地を越えるまで

ビゲル町から進むとチャンドマニという部落がある。南北に伸びる緑の濃い部分があり、川のような。P.に言う蚊と蛇の多い川であり、この東に宿したのだろう。ビゲルから 85km あるこの区間は、水場が 25km 地点のミャンガン・バグと言う地点の一個所だけなので大砂漠と感じたのだろう。ここから道形に進みバヤンブラグ (Bayanbulag) 45.01N98.93E を過ぎたであろう。現在の道はそこから南東に延びて、シネジンスト (shinejinst) 44.55N99.28E に向かうが、そのまま東に向かう通行痕もあり、こちらが近道である。ただ、近道は水の便が良くなさそうな上に道も悪そうである。この辺から真人は時おり牛車に乗りながら進む。体調が良くなかったようなので近道は通らず、道路状況の良さそうなシネジンスト経由だったと考える。一日平均速度を出すのは難しいが、牛車の平均速度 28km/d と騎馬の 60km/d の中間をとって 45km/d として計算し、数日とある日数を 3~5 日とすると、140km から 230km の進行距離になる。この距離で到着した地点から更に 170 里で砂地を越えるのだから、越える直前に到着した地点は、ある程度の水草が得られて馬の力が蓄えられる地点であっただろう。このように考えて GMap を見て行くと、ハタンスウダルの集落があった。44.55N100.83E 地点である。地図を見ても小規模だが水と草地がある。バヤンブラグから、シネジンスト経由で 210km ある。5 日ほど要したのだろう。

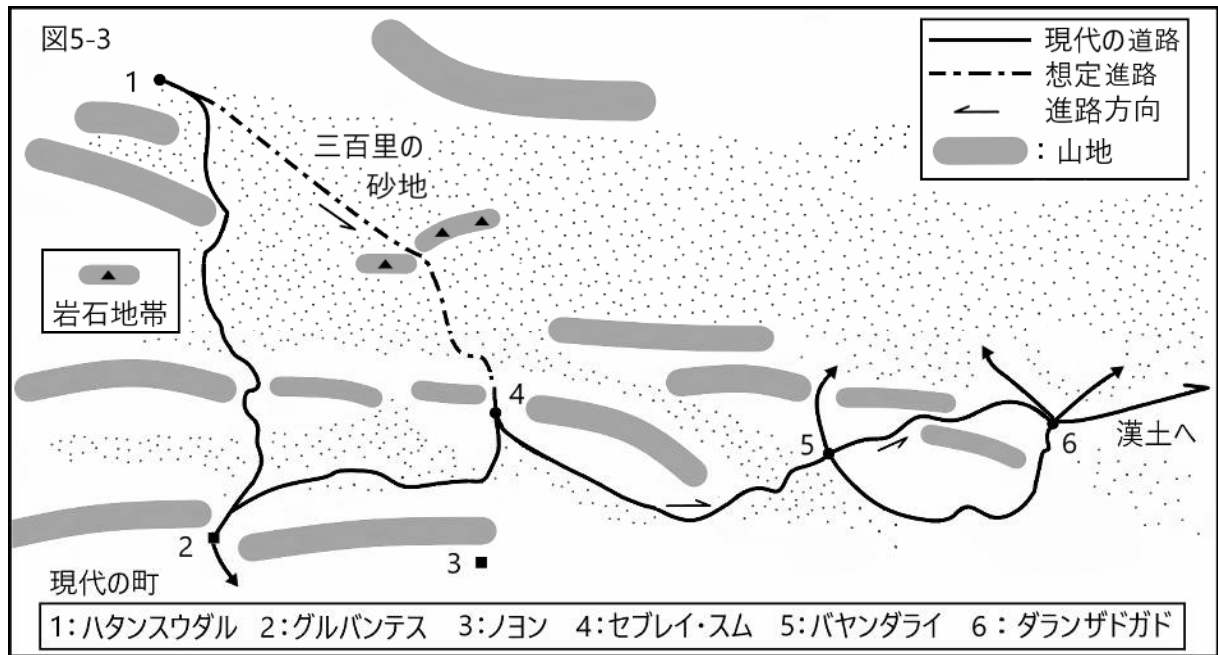
風景描写の欠如

真人が牛車に乗るようになった、との記述から以降、漢土近くになるまで、地点を特定出来るような風景描写がない。イフ・ボグド山はギチゲニー山脈より高く、この季節は雪を頂く雄大な山容であったはずだ。そのすぐ南を通過しているのだが記述がない。弟子達は真人の体調が気になり、風景を書き留める余裕がなくなっていたのだろう。



三百里の砂地を越えた地点

ハタンスウダルの東南方は、赤茶けた大地になっている。これが砂地であろう。これを越えるとタンгутト人の国の北辺になるとある。これは、中国で言う亦集乃（エチナ）路の北に出た事を意味しているのだろう。有名なカラ・ホト、漢語で黒水城は西夏の重要都市であった。現在は額濟納（エチナ）旗という町である。当時、西夏の国はまだ存続していたが、その北方はタンгутト人が住んでいてもモンゴル支配下になっていたのだろう。タンгутト人の国の北辺を地図で探すと、三つの候補地があった。グルバンテス（Gurvantes）、ノヨン（Noyon）、セブレイ・ソム（sevrei sum）である。三百里即ち 170km 程の距離で達することを考えると、ノヨンは少し遠すぎ、グルバンテスカセブレイ・ソムになる。だが、少し前の地図にはグルバンテスの名がないし、集落の規模も小さすぎる。漢土方面へ向かうならダランザドガドを経るはずだが、そこにも遠い。そのように考えると、三百里の砂地を越えた地点は、セブレイ・ソム、43.59N102.19E であったと考える。砂地を通る経路として二つ考えられる。真ん中を横切ると、現代の道に従って南下し、43.68N101.23E 付近で東に向きを変え、山脈の北沿いに進みセブレイに達する経路である。だが、後者ではブレイ・ソムにまでの距離が 200km ほどになる。速度が 70km/d ほどになり、体調は回復したのだろうが、真人にとって早すぎるように思われる。砂地の中心部は周りより少し標高が低いようで、雪解け水に流れた土砂によるものか通行痕が途切れ途切れであるが、44.36N101.16E、44.11N101.74E、43.76N102.05 地点には明瞭に認められ、通行できるのが確認できる。図に想定した経路で約 170km あり、速度 57km/d となり妥当である。文字通り砂地の真ん中を進んで、北方からセブレイに着いたと考えられる。ここで、後続組も先行組に追いついた。



タングット人の国の北辺から漢土へ

この辺りから暑熱を避けて夜行しており、周囲の状況が書かれていない。ただし、月明かりの下で移動しているのを不安に思うよりも、もうすぐ漢土に帰れるという喜びの方がはるかに大きかったであろう。経路は想像するしかないが、ダランザドガドから先は、ツォグトツェツィイ、オユ・トルゴイ付近を経て、ガシュン・スハイトから現在の中国の内モンゴルへ入ったのではなかろうか。到着点でハッキリしているのは豊州である。中国サイトでは呼和浩特（フフホト）市近くとされている。「中華人民共和国地名大詞典」には、フフホトの玉泉区が呼和浩特故城であると書かれているので、豊州はここであろう。そこに至るには北方からの道筋もあるが、山岳地帯を越えなければならず、現在も大きな道路標示がない。交通の容易さを考えると、S212で烏拉特中旗に向かい、そこからS311を経て東進し、固陽県から包頭に南下したのではなかろうか。この辺りは以前の西夏領である。西夏はまだ存続していたが、モンゴルは20年近くも前に攻撃しており、真っ先にモンゴル支配を固めていた地域と思われる。この経路は今も小さな集落が点在しており、進みやすい道だったと思われる。

5. 5 宣徳に帰還

- S. 六月二十一日、漁陽関に宿した。
- T. 翌日関を東に五十余里を過ぎて豊州に至り、その地の元帥以下の来迎を受けた。
- U. 七月一日（西暦1223年7月30日）、また行を起こして三日には下水に至った。元帥夾谷公は城を出て出迎えた。
- V. 翌日（七夕の翌日）出発した。この月の九日、雲中に至った。…二十日間滞在した。
- W. 八月の初め東に向かい楊河に行き、白登、天城、懷安を経て渾河を渡り、十二日には宣徳に到着した。

漁陽関と豊州

モンゴル南部から、いきなり漁陽関に飛び、そこから五十里で豊州である。ネット検索で

は、漁陽関はあるが湖北省であり、漁陽なら天津や北京の近くにあった県である。漁陽関ズバリの名は探せなかった。豊州の名は時代によってあちこち移っているが、ここでは現在の呼和浩特市付近と考えるのが妥当であろう。想定経路からすると、漁陽関の場所はフフホトの西にあるはずである。関がありそうな地形は、山からの出口に紅領巾水庫というダムがある地点、40.77N111.32E である。水が豊富そうなので漁が行われていたとしてもおかしくはない。川は真南に向いているので漁陽関と言えそうである。真っ直ぐ東に向かえば呼和浩特市の玉泉区に 30km であり、方向と五十余里の距離が一致する。フフホトの大黒河を南に渡ると匈奴に嫁いだ王昭君の墓がある。

速度と行程

チンカイ城を最も遅れて出た李志常たちの出発日が 5/18 である。一行全員が 6/22 に豊州着なので、チンカイ城から 35 日間の旅であった。およそ 1,700km あるので、平均速度は 49km/d となる。真人は 3 日早く出ているので、平均速度 44km/d となる。真人の体調不良もあったが、昼間の暑さを避けて夜行が多く、あまり速度が出せなかったのだろう。

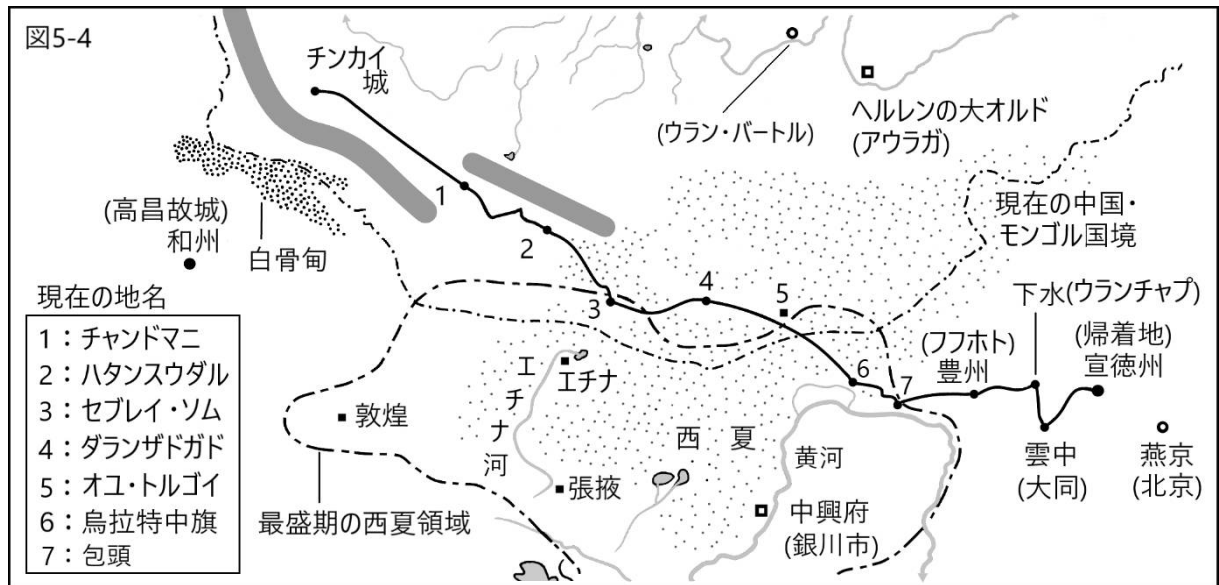
豊州から宣徳州

豊州の次に立ち寄ったのは下水という妙な地名で、中国資料でも探せなかった。ただ、中国語の下水に、日本語の汚水の意味は無く、水に浸かる又は水に浸けるであるから、水の豊富な土地なのであろう。原注には大同から来た夾谷公が歓迎したとある。大同は次の雲中であるから、下水は大同管理下の小さい町のように思えるが、ここでも数日滞在しているほどだから、それほど小さい町ではない。雲中が現在の大同市であるのは動かせないから、下水を比定すれば現在の烏蘭察布（ウランチャップ）である。フフホトから 145km であり、7/1 から 7/3 までの 3 日で至ったことに合っている。霸王河という水の豊富な河もあり、下水の名にふさわしい。次の大同へは 7/8 に出発し翌日 7/9 に到着している。距離はウランチャップから 102km なので問題がない。ここまでの行程は騎馬行である。

雲中から宣徳州への途中にある白登は、現在の大同市陽高県で市の北東にある。そのまた東の天鎮県が天城である。懷安は今も張家口市の懷安県に名を留めている。大同から宣徳州まで 210km ある。8/1 に出発し 8/12 に到着の 12 日間だから、18km/d の速度となる。牛車行であろうが、それにしても遅いのは、道の悪さではなく、各地で 1 日ずつほど引き止められたからだろう。この間の 350km ほどの行程は、各地の長官から凱旋將軍のような歓迎を受け、群衆が話を聞こうと真人の元に押し寄せる状況が書かれている。スーパースターとして迎えられたのだ。

全行程日数

宣徳を出発したのが 1221 年の陰暦 2 月 8 日だから、二年半の旅であった。出立時、「三年で帰る」と言った信者たちへの約束が果たされた。



5. 6 まとめ

- ① 帰路は往路と異なった経路、即ち北庭故城を経る草原地帯を通り、三塘湖を経てシャルガ盆地の南西に出、チンカイ城に着いた。1223年3月10日にシル河を出て、1223年の5月1日着の2か月の旅であった。
- ② 大山に雪があったことと、蚊と虻の多い所から以降に風景描写がない。イフ・ボグド山は東西に長い山容を持つ雄大な山であり、その直ぐ南を通過しているのだが全く触れていない。長春真人の体調がすぐれないことが気がかりなので、風景を記録に残す気持ちの余裕がなくなっていたのだろう。
- ③ タングット人の土地の北辺というのは、エチナ路の北への延長上にある現在のセブレイ・ソムと考えて間違いないであろう。当時はモンゴル勢力圏になってはいたが、元々はタングット人の土地であったと思われる。
- ④ 漁陽関については、更に良い情報を探したい。
- ⑤ 帰路の大部分は騎馬行であり、平均速度 60km/d を保っていたが、往路では大体 80km/d で進み、時には夜行もして 100km/d の所もあった。速度を落としたのは本文でも述べたように、帰路を早めるために、牛車行をせずずっと騎馬行なので、一行にとって身体の負担の少ない速度に落としたのだろう。虚静先生の死も関係しているのだろう。長春真人の体調も良くなさそうであった。

第5章了

終章

グーグルマップを用いて西遊記の旅程を追跡した。地点特定と距離測定機能は大いに威力を発揮し、不明だった経路を推定することができた。西遊記の記述はおおむね正確であったが、一部記述が前後している部分や日数や距離が誤りではないかと思われる部分もあった。ヘルレン河変曲点で一行が立ち寄った場所、長松嶺の後、長松嶺の西、金山の東北の地点など、不明であった通過点も旅の速度から推定して見出す事が出来た。難解であった白骨甸の位置も明らかに出来た。チンギス・カンと真人が会談した地点がバグラーンと判明したのは、衛星写真で鉄門付近の地形を確認でき、グザルが鉄門関と呼ばれていたとの推定ができたおかげであった。会談地をターロカーン（タロカン）やパルヴァーン（パルワン）としている書が多いが、地形を見れば、冬営地や、冬営後の展開に適していないことは理解できるだろう。

筆者が驚いた事は、現在は大きな街道が通っていない場所や、現在使われているとは思えない場所に、明瞭でかつ激しい通行痕が何箇所も見られた事であった。魚児濼の周辺、東ウジュムチンからタムサブラクを経てハルハ・ゴルに至る道、トーラ河を西北に横切る経路、イリ川を南北に渡る地点などである。現役の経路もあろうが、交通手段の発達や近年の国際情勢の変化、更には人による地形改変などで使われなくなった道も多くあるのであろう。科学的、考古学的に何時代のものか判別できるのであろうか。

この研究で西遊記の不明点の多くを解明できたものと信じるが、あくまで地図上の理解に過ぎず、現地で調査して確認しなければならないことが多くある。

- ① 蓋里泊から魚児濼に至る道程
- ② 東ウジュムチンからタムサブラク方面に伸びる激しい通行痕の実態
- ③ ヘルレン河屈曲点の遺跡の性質
- ④ トーラ河渡河点とカラ・トンからそこに至る経路の実態
- ⑤ 長松嶺の後ろと西の位置の妥当性
- ⑥ トソンツェンゲル付近にオールドが存在した痕跡
- ⑦ そこからウリヤスタイに至る行程の地理環境
- ⑧ ヤルーギ河付近の故城の性格
- ⑨ チンカイ城からアルタイ山脈を越える道
- ⑩ 二座の赤い山から白骨甸を経て三塘湖に至る道
- ⑪ ベシュバリク城はウルムチであるとの確認。
- ⑫ 輪台とジャンバリク城は同一地であるとの確認
- ⑬ アルマリク城の位置の再確認
- ⑭ イリ河を渡った地点と経路の確認。
- ⑮ 山北の小城をタウカラトゥリクに比定する妥当性の確認。
- ⑯ アルマトゥイから大石林牙に至る道の確認と大石林牙推定地の調査
- ⑰ グザルを鉄門関と呼んでいたことの確認
- ⑱ アム河を渡ってバグラーンに至る道の確認
- ⑲ バグラーンでの当時のモンゴル遺物、遺跡などの調査
- ⑳ その他

筆者は門外漢なので専門家に調査して頂ければ幸いである。

それにしても、十三世紀の七十歳を越えた老人が、牛車はともかく、騎馬行に慣れ、野外で宿泊する日々をほぼ三年続けての旅であった。その中には、現代の人間が同じコースを現代の乗り物で進め、と言われても躊躇するような経路がいくつもある。いくらチンギス・カンが他国の有名人を招聘しても来なかったはずである。その中を、時には騎馬で夜行し、時には一日 100km 近い速度で駆けて、三年にも及ぶ旅を完遂した長春真人は正に超人と言える。帰国後真人に対する一大フィーバーが起きたのも当然と思える。帰国してから四年後に八十歳で亡くなった。腸を患っていたようなのは、長期間の乗馬をしていた振動の影響かも知れない。弟子の趙九古がなくなった後、乗馬での移動速度が 60km/d 以下に落ちている。

同行した弟子の尹子平、西遊記を記述した李志常とも、真人亡きあと教団を引く継ぐ指導者になった。その本山であった白雲觀は現代の北京に残り、長春真人の遺骸を納めた処順堂を中心に建てられており、全真教は中華人民共和国となるまで、道教の主流として存続した。命を賭けた真人の努力は実ったと言えよう。

本研究がモンゴルから西域方面の中世の交通路の実態を読み解く鍵になれば幸いである。

終章了

資料

参考にした資料を以下に記す。特に白石先生の著作には多くを負っている他、魚児楽の情報を頂いた。ウェブサイトでも中国の地名情報を多く得たが、アドレスは記さなかった。

GMap も更新されているようで、5 年前には、東ウジュムチンからモンゴルのタムサグ・ブラグへ向かう中国内とモンゴル内の通行痕をはっきりと確認できたが、今回再び見ると、中国内の通行痕がかなり消えている。農地開発によるものであろうか。モンゴル内の通行痕も見にくくなっている部分がある。一方、地名表示が増えて分りやすくなっている。

史料

『長春真人西遊記』李志常：(1966) 台湾中華書局發行
(十六国春秋、華陽国志、長春真人西遊記) 合本版

参考文献

- (1) 岩村忍訳 (1961) 「長春真人西遊記」 322 頁
『世界ノンフィクション全集 19』収載、筑摩書房
- (2) 白石典之編 (2015) 「チンギス・カンとその時代」 勉誠出版
- (3) Arthur Waley (1931) 「The travels of an alchemist」 Haedley Brothers, London
南天書局 (台湾) 再版本
- (4) 窪徳忠(1963) 「長春真人とその西遊」 東京大学東洋文化研究所紀要
(国立国会図書館サーチより入手)
- (5) 白石典之(2012) 『「魚児楽」再考』 日本モンゴル学会紀要第 42 号
- (6) 関口精一(1988) 「改訂再版シルクロード詳図 蘭州からアラル海まで」 八雲書店
- (7) 白石典之著 (2001) 「チンギス・カンの考古学」 同成社
- (8) 白石典之著 (2017) 「モンゴル帝国誕生」 講談社
- (9) 杉山二郎訳注(2002) 「長春真人西遊記」 国際仏教学大学院大学

(10)千田嘉浩(2009)「契丹城閣の比較研究」『中世東アジアの周辺世界』コラム 11、同成社
改訂履歴

2017年12月5日研究ノートとして初稿作成

2018年5月30日第1改訂

初稿と大きく変わらないが、写真を加えた他言葉使いを部分的に改めた。終章における
漁陽関と豊州の位置の考察は書き変えた。

2019年10月16日第2改訂

白骨甸の図を入れ替え、最終行程の考察を書き変えた。

2020年12月11日第3改訂

浅い川を、南（後）タミル川とした。

2023年11月15日第4改訂

これまでは、魚児渚へ至る経路、白骨甸を越えて和州に至り、ベシュバリク城に向かう
経路、イリ川から山北の小城に至る経路、タングト人の北辺へ三百里の砂地を越える経
路などに十分な説明が出来なかったが、考え直して訂正した。大石林牙の位置も明らか
にすることが出来て、旅の解析は終了したと考える。本改訂で最終稿とする。

以上